
ほのぼの魔王ときまじめ勇者

黒野茜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ほのぼの魔王ときまじめ勇者

【Nコード】

N5321V

【作者名】

黒野茜

【あらすじ】

～あらすじ～

一人で帝都を離れ、旅に出た元・騎士の少女イリヤ。だがちょっとした油断から、彼女は人身売買を生業としている奴隷商人に捕まってしまっていた。

そこで偶然出会った、一人の男。

『可愛いね、君。あれ？ そっぴや俺達、前に何処かで出会わなか

つた？』

『口説くにしても場を弁えてくれませんか……？』

彼女を助けに来たという男・エクレール。

そして囚われの身となっていた、生真面目な騎士の少女・イリヤ。

彼と彼女が出会った瞬間、新たな物語が紡ぎだされる。

この作品は異世界で強い主人公がハーレム築いている物語です。
また、Arcadiaの方にも転載しております。

差し込む希望の光

薄暗い牢屋の床の上に、荒縄で縛り上げられた少女がいた。

装飾など何もなく、簡素なベッドと粗末な椅子があるのみの室内。
あかりまど
明窓もなく、外光はまるで差し込まない。

そんな部屋の中を、松明の僅かな灯りが照らし出す。

揺らめく炎の光に映し出されたのは、黄金のように美しい金紗の髪だった。

身なりからして旅人然とした小柄な少女。

だがその全身にはハッキリとした力強さが見て取れ、少女にか弱さや儚さという印象は微塵もない。

現に後ろ手に縛られ、両足も縄で縛り上げられていた彼女だったが、その紺碧の瞳には未だに強い抵抗の意思と不屈の輝きが宿っている。

「我ながら、なんともマヌケなドジを踏んだものです……ッ！」

イリヤ「シュヴァルツ「アイゼンバーク」

それが彼女の名前だった。

誇りを重んじる騎士の国、オルティシア。

大陸北方に位置する彼の国を飛び出し、わざわざ辺境の地まで魔獣蠢く森を抜けてきたというのに、よりにもよって肝心な所でしようもないミスをした自身に彼女は齒噛みする。

伊達に女の身で一人旅をしている訳ではなかった。

帝国貴族として騎士の家系に生を受けた身として、彼女はたゆまぬ鍛錬が続けてきたし、それに見合った剣の腕も身につけていた。

実際、彼女が通っていた騎士学校で彼女に敵う者など、もはや教官たちの中にも存在しなかったぐらいだ。

故に、この旅に委細問題などある筈なかった。

道中、様々なモンスターを相手にしてきたが、ただの一度も危うい目に遭ったこと等なかったのだ。

だというのに、まさかよりもよって同族である人間の手によって斯様な辱めを受ける事となろうとは、彼女は考えてもいなかった。

旅に出れば当然、何かと入用になってくる。

彼女自身は欲が薄いと自負していたが、それでも先立つものがなければ何事もままならない。

幸い彼女には優れた剣の腕が有ったので、ギルドで護衛などの依頼をこなそうという考えに至るのは必然と言えた。

だがまさか、路銀を稼ぐ為に引き受けた護衛依頼で、よりにもよって護るべき護衛対象に毒を盛られると誰が思うと言うのか。

たまたま引き受けた相手の商人が、どうやら裏では非合法の奴隷商としての顔を持っていたらしく、更に最悪な事に彼女は奴隷商のお眼鏡に適ってしまったらしい。

もちろん、商品として。

気づけば夕食に薬を盛られていたらしく、目が覚めると縛り上げられ、移送用の檻に放り込まれていた。

上玉として特別に個室を割り当てられたイリヤだったが、目が覚めたときに見た商人の下卑た笑みと、同じく檻に入れられていた少女達の姿を思い出すたびに、腸が煮えくり返るような殺意が込み上げてくるのを感じていた。

「早くなんとかしなければ……」

先程から何度ももぞもぞとした動きを繰り返しては、イリヤは縄を抜けることが出来ないかと試みる。

一刻も早く此処を抜け出し、卑劣な奴隷商に鉄槌を下すべく。彼女自身が助かる為でもあったが、それ以上に此処に囚われている大勢の奴隷達を救いだしたかった。

もともと帝国法で人身売買は禁止されている。

奴隷商のアジトに連れて来られるまでに、一緒に檻に入れられていた少女たちに話を聞いてみたが、どれも戦災孤児や誘拐などの事情があった。

イリヤにはそれが、何よりも許しがたかった。

弱者を食い物にする悪鬼羅刹の所業が、度し難い。

尊敬する母から受け継いだその魂が、断じて許してはならないと叫んでいた。

ドレスの代わりに、軍服に袖を通した。

花の代わりに、剣を手にした。

腰まであった髪は、戦いの邪魔になると切り落とした。

躊躇いなど無かった。

自らの選んだ道だ。

彼女はそれを誇りに思っていたし、なによりも幸せに感じていた。

目の前の救われぬ少女たち。

その生命を――。

その未来を――。

その幸福を――。

彼女たちのような人々を救うために、彼女は騎士の道を志したのだから。

「……よし！」

そのとき、縄が僅かではあったが緩む。
確かな手ごたえを感じ、イリヤは小さく歡喜の声を上げていた。

これが普通の縄だったら、とづくに引き千切つても逃げていたのだが、ご丁寧に対モンスター用の頑丈な魔術付与式捕縛縄サーヴァント・ケイジだった。明らかに過剰な措置である。

どうやら奴隷商たちは、道中に見た彼女の實力をよほど恐れているらしかった。

敵に恐れられる、というのは悪くない。

しかし、普通なら트롤ルやビッグフットのような怪物に使用するマジックアイテムであり、それらと同列に扱われるのはイリヤとしても複雑極まりなかった。

いくらイリヤが女としての人生を捨てたとはいえ、流石に人間まで捨ててはいない。

獣に匹敵するような膂力じょりきなどある筈もなく、畢竟ひつき、こうして今まで地道な作業を続けていたわけである。

「巡回の兵士が来るまで、まだ一刻はあるはず……。今なら……」

衛兵の巡回時間は、だいたいの感覚程度ではあるが把握していた。今まで何度か兵士たちが訪れたことがあったが、その周期を彼女は秒単位で数えていたのだ。

逸る心を鎮め、されど敏速にイリヤは作業を続ける。

何度も縄から手を引き抜こうともがき、その白い手首には擦り切れた血が滲み出ていた。

傷口に荒縄が食い込むたびに更に肉を刮こそぎ取られ、間断なく続く拷問のような責め苦に彼女は歯を食い縛る。

ぬめりとした自らの血液が潤滑油代わりとなったのか、縄は少しずつではあったが着実に外れ始めていた。

あと一步。

この縄さえ外れてしまえば、イリヤにとって後はどうともなる事だった。

仄暗い闇に包まれた牢獄に僅かに希望の灯が点り、彼女は口元を綻ばす。

だが、そのとき。

不意に、カッン、という乾いた音が彼女の耳を打った。

「まずい……っ！」

一定のリズムを刻み、淀みなく周囲に反響する音。

それはイリヤにとって最悪なことに、靴底が廊下を打ちつける音だ

った。

見回りの兵が来るのはまだ当分先のはずだった。
予想外の事態に、イリヤは抑えきれない焦燥を感じる。

数え間違えた？

いや、それはない。

ならば何故もう向かってきている？

偶然？

いや、それよりは自分に何か用があるのではないか。

だとすると、このままでは――。

ぐるぐると渦巻く思考の坩堝に、イリヤは今まで以上に乱暴に身をよじり、必死になってもがく。

激痛は今まで以上のものであったが、もはや気にしてなどいられなかった。

今まで定期的に訪れていた衛兵が、わざわざタイミングをずらしで見回りに訪れる理由などない。

つまりそれは見回り以外の理由であり、もし連れ出されるなどあれば縄の綻びにも気づくだろう。

最悪の場合、更に拘束を強められ、そうなればイリヤに逃亡のチャンスなど巡ってくる筈もない。

刻一刻と迫りくる足音。

心臓は弥いが上にも鼓動を早くし、縄は今まで以上にきつく感じられた。

だが焦燥する心とは裏腹に、縄はそれ以上ちつとも緩んではくれない。

そうこうしている内に、足音は牢屋の扉の前で止まっていた。

終わった。

イリヤの心に絶望が重く伸し掛かる。
もうこうなつては、おとなしく遣り過ごせることを願うだけだ。

ガチャ、とトアノブを回す音が一度。

そして続けざまにカチャカチャと鍵を開けようとする音が聞こえてきた。

その音に、イリヤは僅かな違和感を感じる。

相手はこのアジトを利用してゐる人間だ。

その人間が、何故わざわざ鍵が掛かっていることが判りきっているドアを、鍵を外しもせずに開けようとしたのか。

それだけではない。

今こうして聞こえてきている解錠の音にしても、明らかに鍵を差し込んで回している音ではなく、何かの道具を使って無理やり解錠しているような作業音だった。

イリヤは訝しむ。

何者かは知らないが、少なくとも奴隷商側の人間ではない。
そんな人間がここにゐる事の意味が理解できず、彼女は眉を顰^{ひそ}めて扉をじつと見る。

やがて、がちやりと音を立てて扉が開く。

薄暗い闇の中に差す一条の光。

突然の眩い光に、イリヤは思わず目を閉じる。

「——っ」

だんだんと、徐々にではあるが目が慣れてゆく。

うつすらと目を開けると、そこには後光を背にした男の姿があった。

上下ともに漆黒の衣服に身を纏い、同じく闇色の外套^{コート}を羽織った男。

眼鏡を掛けた柔和な顔つきをしており、首には長い純白のマフラーを巻いている。

整った端正な顔立ちからは気品とも呼べる育ちの良さを感じさせ、その様は一言で言えば、なんとも『場違い』と言えた。

さらさらとした黒髪を揺らしながら、男は僅かに驚いた表情を見せる。

そして彼はこう言った。

「可愛いね、君。あれ？　そういや俺達、前に何処かで出会わなかった？」

「口説くにしても場を弁えてくれませんか……？」

あまりにもあんまりな台詞に、イリヤはこの場が牢獄の中であるという事実も忘れて脱力する。

なんというか、詐欺だと彼女は思った。

さっきまで男に感じていた品の良さは何だったのか。

目の前の男がたったいま口にした口説き文句としか取りようのない台詞に、彼女は幻想を打ち碎かれた気分になる。

だがそんな彼女の姿を見て、男は微笑を浮かべる。

「ははっ、ごめん。けど、険しい顔をしているよりは余程いい」

冗談めかした言葉だったが、それは相手を労わる優しさに満ちて

いた。

それはこの場所において、もつとも異質な空気。
見る者を安心させる何かをもって、黒衣の男は佇む。

「俺の名前はエクレール。よければ君の名前を覚えてくれるかい？」
「……。イリヤです、イリヤ」シュヴァルツ「アイゼンバーグ……」
「イリヤ、か……。いい名前だ」

噛み締めるように復唱し、エクレールと名乗った男は瞳に愁い^{うれ}を
帯びた眼差しをイリヤへと向ける。

何かを懐かしむような、そして慈しむような視線。
それを振り切るようにして、彼は首を横に振る。

「時間もあまりないから手短に行こう。——イリヤ、君を
助けに来た」

それは真摯な響きの声音。
床に這い蹲^{はつくま}るイリヤと、彼女を見下ろすエクレールと名乗る男。
二人の出会ったこの瞬間が、この物語の始まりだった。

第一節

国境付近に位置する、人気の無い森の中に不自然に聳え立つ豪邸。煉瓦造りの堅牢な外壁に囲まれ、見張りがうるついた其処は、人が住む家というよりは要塞という印象を与えてくる。

事実、正面から攻略するのには相応の労力を要するであろう。

この建物の中には今、多くの少女たちが捕らえられていた。用途は奴隷。

この屋敷が位置する帝国の法は勿論、大陸に存在するどの国でも法的に禁止された闇市場のひとつ。

そんな非合法な商いを営んでいるのが、この屋敷の主だった。

そして、その屋敷の主にとって招かれざる客である男が一人。

漆黒の意匠に身を包んだ、眼鏡を掛けた柔和な顔つきの男。

エクレールは今、屋敷の豪華な廊下を一人、人目を忍ぶように進んでいた。

時折すれ違う衛兵たちには、漏れなく物理的な方法で眠りに就いてもらいながら。

エクレールが此処へ来たのは、端的に言えば偶然だった。

彼はもともと大陸西方に位置する国、セルシウスにて教師を務めていた。

教え子たちに様々な学問や人としての在るべき様を説き、その人生を正しい方向へと教え導くのが彼の仕事であり使命であつた。

そんな彼にとって自らの教え子が誘拐されたというのは、将に青天の霹靂とも言える大事件だった。

ある晴れた日のこと、彼は子供たちとともに遠出をしていた。
どこまでも澄みきった蒼穹。^{そらぎゆう}
流れる風は心地よく、柔らかな日差しは人々を暖かく包み込む。

まさに絶好の行楽日ともいえるその日、学校の授業の一環で自然と触れ合い、そこで様々な事を学ぶべく子供たちは遊びという名の勉強をしていた。

机の上で学ぶことだけが全てではない。

こうして外に出て、様々な事を体験することもまた、子供たちにとっては必要不可欠なことだった。

一人ひとりが大切な、国の将来を背負う子供たち。
狙われたのは、そんな遠足中の子供たちだったのだ。

「大丈夫、まだ無事のはずだ……」

脳裏に浮かぶ子供たちの笑顔に否応無く不安が膨らんでいく。

あの笑顔を守るために、彼は遠路はるばる国境を越えてまで誘拐犯たちを追ってきたのだ。

セルシウスの憲兵に連絡を取る、という手段は諦めていた。

誘拐事件の解決は時間との勝負であり、時が経てば経つほどその解決は困難を極めることとなる。

一度街などに戻っていては、手遅れになることも考えられたのだ。

結局、彼は単騎で誘拐犯たちの足取りを追っていた。

勿論、残りの子供たちは別の先生に引率を頼んで。

「ここら辺……今までと空気が違うな」

明らかに頑強な造りをした分厚い鉄製の扉を目に、エクレールは
呟く。

彼がそつと扉を開いて中の様子を窺^{うかが}つてみると、詰め所のような場所に男が一人。

室内の様子も、今までの悪趣味なまでに調度品で溢れていた廊下から一変、粗雑な造りをした収監所のような雰囲気となっていた。

彼は確信する。

どうやら此処が当たりで間違いなさそうだと。

「一人……。できれば戦闘は避けたいけど……」

これからの事を考えれば、極力無駄な戦闘は避けるべきだろう。此処に来るまでもに何度か衛兵を伸している以上、今更と言えば今更かもしれないが。

一人相手ならばエクレールは如何にかなると算段をつけるが、仮に他の仲間が近くにいた場合が厄介だった。

どうしたものかと更に注意深く様子を窺っていると、エクレールはある事に気づく。

詰め所の窓から見える男の体が、上下に舟を漕いでいた。

そつと近づいてみると尚更に良く判った。

なにせいびきまで聞こえてくるのだから。

「……………」

なんともお粗末で杜撰^{ずさん}な警備だったが、エクレールとしては寧ろ^{むし}ありがたい。

いびきを掻^かいている男の前をそつと通り抜け、エクレールは先を急ぐことにした。

これがセルシウスの軍属だったら、軍で將軍職を務めている知人辺

りに地獄の折檻を受けているだろう、と割とどうでも良い事を考えつつ。

そして彼は収監所の中を進み、不意にひとつの独房の扉の前で足を止めていた。

中から聞こえてきた物音。

そして人間のものと思しき苦悶おほの声。

分厚い扉越しでは判別できなかったが、彼の生徒達の可能性もあった。

仮にそうでなくても、もとより此処に來た時から奴隷達を全て助けるつもりだった彼に、その扉を前にして素通りするという選択肢は無かった。

「まあ、当然か……」

ためしにドアノブを回すもやはりと言うべきか鍵が掛かっており、彼は仕方なく自前のピッキングツールで鍵を開く。

その手つきは実になれたもので、扉が開くのはあっという間だった。

そして、中にいた人間を見て彼は絶句した。

押し開いた扉の先、独房の中にいたのは黄金の髪をした少女だった。

見た目に判る上質な髪と、絹のように透明感のある白磁の肌。

その頬は独房の汚れで煤けていたが、その程度で少女の美貌は霞みもしない。

そんな絶世と評しても差し支えない美少女が、両手足を縛り上げら

れ、牢獄の床の上に芋虫が何かのように這い蹲る姿勢でいた。

一種背徳的な美しさを醸し出す光景なのかもしれないが、エクレー
ルはその光景にただ一言呟く。

「……許しがたい、な」

その呟きは少女には聞こえなかっただろう。

こちらを見上げている少女だったが、突然差したエクレールからの
逆光に目を細めるばかりで、特に声を発しない。

しかしエクレールが扉を閉めると、少女はゆっくりと瞳を開いてい
く。

やがて完全に開かれた彼女の紺碧の瞳が、エクレールのことを射
抜くように見つめていた。

この場に現れた彼の姿に露骨に警戒して見せているようで、エクレー
ルは暫し逡巡すると、わざとらしい声音で言う。

「可愛いね、君。あれ？　そっぴや俺達、前に何処かで出会わなか
った？」

「口説くにしても場を弁えてくれませんか……？」

その言葉に表情を崩した少女の様子に、エクレールは微笑を浮か
べる。

呆れられたような態度ではあったが、敵視されたり警戒されたりす
るよりは余程マシだった。

「時間もあまりないから手短に行こう。——イリヤ、君を
助けに来た」

そう言ってエクレールが近づくと、彼女はもう先ほどのように警

戒した表情は見せてこなかった。
うつつ伏せになって背を見せると、縄で縛られた両手足を見せて彼女は言う。

「ごらんの有様ですので、ほど解いていただけると助かります」

「ああ、了解。少し待っててくれ」

どうやら助けに來た人間だと言うことは理解してもらえたらしく、全幅の信賴とまでは行かなくとも警戒は解いてくれたらしい。イリヤを縛り付けていた縄を解きながら、エクレールは彼女に語りかける。

「ところでイリヤ、君はどうして此処へ？」

「それは……」

言い差して、イリヤは言葉を濁す。

それを見て、エクレールは口元に僅かに笑みを刻んで言う。

「……配慮が足りなかった、すまない。言いにくいことなら言わなくてもいい」

「いえ、そんなことはありませんよ。ただ、たまたま護衛した相手がここの主人だったというだけです」

「なるほど……。それで運の悪いことに気に入られて
サーヴァント・ケイジ
って、もしかしてこれ魔術付与式捕縛縄か？」

会話をしながらも着々と縄を解こうとしていたエクレールだったが、一向に緩む様子の無い縄に渋い顔をする。

本来これは、非常に^{りよりよく}膂力の強い大型モンスターに使用するような代物だ。

戸惑った声を上げた彼に、イリヤが問いかける。

「無理矢理とはいえ、少しは緩ませることが出来たのですが……。解くのは無理そうですね？」

「いや、それは可能だ。それでも魔術には長けていてね。少しばかり待ってほしい」

そう言つて、エクレールは懷から一本の試験管を取り出して、中には液体が入っており、色は毒々しいまでの緑色。

視界の端にそれを捉えたイリヤの表情が、思わず引きつっていた。

「あの、エクレール？ それはいつたい？」

「ん？ ああ、これ？ 俺特性の魔法薬。魔術の触媒には打つてつけだから、これを使えばすぐに解呪できるよ」

「しかしその色は……。いえ、あなたに任せます……」

本当に大丈夫なのか不安になるような品だったが、対してエクレールは自信の笑みを見せる。

イリヤに何ができるわけでもなく、不承不承とではあったが彼に任せることにしていた。

「覚悟はできました。煮るなり焼くなり如何様にもッ！」

「そんな土道覚悟完了みたいに気負われてもね……」

少女の大げさとも言える態度に苦笑するエクレールだったが、どうやら彼女は彼女で真剣らしく、ジッと目を閉じて動こうとはしない。

その様子に軽く溜息を零すと、彼は早速作業に取り掛かっていた。

「——っ！」

試験管から零された粘性の液体が縄から手首へと伝い、その冷たさにイリヤは僅かに体を強張らせる。

不思議と傷口に染みるということは無かったが、ぬるぬるとぬめったその感触はえもいわれぬ不快感があった。

眉間にしわを寄せたままのイリヤに、エクレールは言う。

「おそらく、最初から術式に破損が生じていたんだろうけど……これって普通はトロールとかを拘束するのに使う物だよ？ それを僅かとはいえ緩ませるって、君って本当に人間かい？」
「私がトロールに見えるとでも？」

続けて、エクレールは足元へと魔法薬を垂らす。
聞こえてきた声音に剣呑な響きを感じ取った彼は、イリヤからは見えないことを承知で頭を振った。

「少なくとも、こんな可愛らしいトロールは見たことがないな」

すると、イリヤは複雑そうな顔をしてみせた。
嫌がっている訳ではなさそうだったが、どちらかというと、どう返すべきか悩んでいるといった感じである。

「可愛い……ですか？」

「ああ、可愛いよ。少なくともモンスターには見えないぐらいには
——— つと、解呪完了だ」

エクレールが言うと同時に、バキンッ！ と何かを砕くような音が響く。

それは縄に施されていた術式が壊された音。
男の言っていた通りに術式が破壊されたことにイリヤは驚くが、エクレールはそのまま何事もなかったかのように彼女を拘束していた

縄を解いていく。

全ての縄を解き終え、イリヤが自由の身となるのに然^さしたる時間は掛からなかった。

「ありがとう、エクレール。あなたの助力に感謝します」

「どういたしまして、イリヤ。……ただ、もうひとつやらない事があるけどね」

礼を述べるイリヤの手を、エクレールは躊躇^{ためら}うことなく取る。

一瞬なに事かと戸惑いを見せる彼女を余所^{よそ}に、エクレールが始めたのはイリヤの手首の治療だった。

「あの、何を……？」

「見ての通り治療だ。といつても、応急処置程度だけ……」

「このぐらい別に構いせん！ それよりも早く——」

「いいや、構う。縄で肉が刮^{こそ}げ落ちてるんだ。このまま放っておいたら、出血量も馬鹿にならないよ」

論理的であると同時に、聞く者に有無を言わさぬ力強い言葉。

イリヤが言い淀んでいる隙に、エクレールは慣れた手つきで消毒を行うと、彼女の手首に薬と塗りつけ、包帯を巻きつけていく。

テキパキとした迅速な応急処置。

ほとんど一瞬で作業を終えると、エクレールは彼女に向かって微笑む。

「これでいい。あとは町にでも戻ってから、ちゃんとした医者に見せるんだ。いいね？」

安心させるような優しい声音のまま、エクレールはイリヤに一切

れの紙を差し出す。

それは、この屋敷から外への脱出経路が記された、簡易的な手書きの地図だった。

「僕は他にも助けなきやいけない人がいるんだ。幸い、この先の見張りは眠っているし、道中の衛兵達はあらかた片付けてある。君でも十分――」

「ま、待つてください！ 私一人で逃げると言うのですか!？」

激昂した少女の突然の剣幕に、エクレールは面食らったように僅かに目を丸くする。

そんな彼の様子に気づいた風もなく、イリヤは矢継ぎ早に言葉を浴びせかけていた。

「エクレール。私はこれでも帝国騎士の端くれだった者です。剣の腕には自信がありますし、何よりあの奴隷商のような男をのさばらせるなど、私自身の矜持が許しはしない。私も共に行きます……!」
「いや、そうは言っけど……」

エクレールは困ったように頬を掻く。

彼としてはイリヤを今回のごたごたに巻き込みたくはないのだが、彼女の一途なまでに見つめてくる真剣な眼差しに、どうしたものかと困り果ててしまう。

少女の言葉の端々からは自信が感じられたし、事実として自負するだけの剣技の冴えを彼女は誇るのだろう。

しかしながら――、

「剣の腕に自信があるのは判るが、君は今、その肝心の剣を持っているのかい？」

「そ、それは……。た、たしかにそうですが、必ず役に立ってみせます！」

イリヤ自身、痛いところを疲れたとは思ったのだろう。だがそれでも、彼女は食い下がることをやめようとはしない。本格的にエクレールが対応に困っていた、その時だった。

不意に、独房の扉が開いた。

「おい、女。ウチの旦那がご指名だ——つて、誰だデメエ——！！」

それは、奴隷商の手下だった。

男の言葉が独房に響いた瞬間、それが敵だと認識した瞬間。

二人の時間は弾かれたように動き出す！

「ッ！」

男は増援を呼ぶためだろう。

胸元に紐でぶら下げた笛を吹こうとした。

だが男が笛を吹くよりも早く、イリヤが蹴飛ばした椅子が、男の笛を持つ手を弾き飛ばしていた。

そして男が痛みで悶絶している隙に、エクレールはその間合いを一足に詰めていた。

「がつ！ ま、待て！ ギャ！？」

エクレールは駆け寄った勢いもそのままに男を殴り倒すと、その

まま男を挟み込むようにして何度も扉を蹴りつけていた。
分厚い鉄の扉に何度も挟まれた男が意識を刈り取られるのに、たいした時間など掛からなかった。

ひとまず無事に遣り過ごせたことに、エクレールは安堵の溜息を零す。

彼がイリヤのほうへと振り返ると、得意げな彼女の笑みが印象的だった。

「どうです、役に立つでしょう?」

「確かにそうかもしれんが……。君は剣士じゃないのかい?」

「なら、尚更ですよ」

そう言つて、イリヤは彼の横を通り過ぎる。

「大丈夫です、これで問題ありません」

衛兵の腰にぶら下げられていた剣を奪い取り、彼女は悠然と牢屋を出ていく。

そのとき見せた凜然^{りんぜん}とした彼女の笑みに、一瞬だけエクレールは見惚れていた。

だがすぐに正気に立ち返ると、倒れていた衛兵の服をまさぐり、鍵束を拝借してから逆に衛兵を牢獄の中へと放り込む。

収監所の廊下ではイリヤが彼のことを待っていた。

確かに剣がある以上、彼女は心強い戦力だった。

そして彼女を兵士が迎えに来た以上、この後の展開として他の衛兵達が彼女の牢を訪れることは想像に難くない。

エクレールに、選り好みをしているだけの時間など残されていな

かった。

「行きましょう、エクレール」

凜とした声音を残し、少女は敵地である事も忘れさせるほどに威風堂々と踵を返す。

「仕方ない、か……」

そのあとを溜息を吐くやら苦笑するやら、エクレールは足早に追いかけていくのだった。

第二節

薄暗く狭い廊下を、小走りで駆け抜けて行く二つの影。

エクレールとイリヤが目指していたのは、収監所の東棟だった。

イリヤが捕らえられていた西棟はどうやら特別な商品だけに割り当てられる部屋らしく、あれから二人が方々ほうほうを探してみたが、結局イリヤ以外に捕らえられている人物はいなかった。

残る場所は必然的に東棟。

そこに捕らわれている奴隷達を救うために、二人は元来た道を引き返していた。

東棟へと続く廊下を通り抜け、そのまま中へと足を踏み入れる。

収容所の印象を一言で表すならば、『家畜小屋』のようだとイリヤは感じた。

壁もあちこちが薄汚く汚れており、時おり鼻を突くような悪臭が漂う。

採光用の窓が設けられていたが、それでもなお十分とは言えず、イリヤはエクレールに助けられた時に感じた眩しさが幻だったかのような気さえしていた。

(……とはいえ、彼は現実存在しているわけですが……)

イリヤは先の光景を思い返す。

今は自分の前を歩く、黒ずくめの謎の男。

この男が助けてくれなければ、おそらく自分は最悪の危機を迎えていただろう、と。

しかし彼女には疑問もあった。

少なくとも目の前の男が奴隷商人側の人間でないことは判っていたが、いったい何処の何者なのか皆目見当も付かなかった。

この場において自分を助けてくれたということは完全な敵ではないのだろうが、十全の信頼を置いていいのかは自信が持てずにいた。

すると、不意に声が掛かる。

「大丈夫かい？」

ハツとしたようにイリヤは顔を上げる。

そこに有ったのは苦笑とも取れる、エクレールの何とも言えない微妙な表情だった。

「何がですか？」

「さっきまで牢屋に捕らえられていたんだ。いざという時に恐怖で動けないなんて事は無いよね」

その一言に、イリヤの表情が僅かに色をなす。

渋面を隠そうともせず、彼女は言う。

「私はこれでもエストレラの卒業生です。恐れるものなど、何もありません……」

「そうか……。まあ、今はそれでいいよ」

「エクレール？」

エクレールの表情が一瞬苦笑したものに変わり、イリヤは訝しむ。だが彼はそんなイリヤの変化には気づかないまま、何やら思索を続ける。

もしかすると気づいていながら、敢^あえて無視したとも考えられるが。

「しかしエストレラか……。それなら行けるか……。？」
「待って下さい、エクレール。さっきのはどういう意味で――
――」

そのとき突然、甲高いの笛の音がイリヤの声を遮った。
耳朵^{じだ}に響いた音に彼女は目を伏せると、苦々しげに重い息を吐く。
そして辺りを警戒するように見渡し始めた彼女に対し、エクレールは暢気とも取れるような声を発していた。

「見つかったやつみたいだね」

「そのようですね……」

「こうなると、人質を全員連れて逃げ出すのは不可能かな……。イリヤ、ここを離れよう」

「なっ！ 人質を見捨てて逃げるつもりですか！」

「そうは言っていないよ」

目を見開き、イリヤは烈火のごとく感情を頭^{あたま}にする。
それでもエクレールは、あくまでも冷静に彼女の激情を受け止めて言う。

「いいかい、イリヤ。此処に奴隷として囚われている人間の中には、俺の教え子たちがいるんだ。俺には彼女たちを助けるという明確な目的がある」

「教え子……？ ……あなた、まさか教師なのですか？」

「そうだよ」

「しかし……」

「信じられない、か」

「……………」

イリヤは言葉を詰まらせる。

その無言はつまり肯定。

無理もない。

助けてくれたとはいえ、素性不明。

最初は国軍が救出活動に來たのかと考えていた。

イリヤはエクレールから妙に場慣れした雰囲気を感じ取っていたし、僅かな時間を共にしたただけだが動きが素人のものではなかった。

だが返ってきた答えは教師。

はつきり言って学校の先生が武装集団相手に単独で救出活動に來るなど、イリヤにとってあまりに空想的過ぎた。

「エクレール……。あなたはいつたい……」

「詳しい説明は後にしよう。悪いが時間も無い。もたもたしていれば事態は悪化するだけだ。だから今は捕らえられている人たちの救出にだけ集中してほしい」

イリヤの言葉を遮るひそひそようにして、エクレールは言葉を紡ぐ。

その言葉にイリヤは僅かに目を伏せ、何事かを思索していた。

イリヤとて馬鹿ではない。

エクレールが何者かは分からなかったが、少なくとも彼の言う事が正しい事だけは理解していた。

返すべき答えなど、必然決まっていた。

「続きをお願いします、エクレール」

「……、ありがとう。イリヤ」

そこでエクレールは一度言葉を区切る。

それから優しく言い聞かせるようにイリヤへと話を続けた。

「残念だが警戒態勢の中、大勢の無力な人々を守りながら無事に逃がすのは不可能に近い。今からまともに戦う力もない人々を連れて、武装した傭兵たちを相手にするのは危険が大きすぎる。だから俺たちは一度退く。そうすれば少なくとも奴らの眼には、俺が君を助けるためにここへ忍びこんだように映るだろう」

「そうなれば衛兵達は私たちが目掛けて襲いかかってくる……。たしかに囚われている人達に及ぶ危険は少なくなるでしょうが……。いったいその後どうするつもりですか？」

「……………」

「エクレール？」

イリヤは首を傾^{かし}げる。

エクレールはすぐには答えない。

一度眼を伏せ、深く息を吐き、彼は再び瞳を開く。

イリヤの瞳をじっと見つめ、彼は口を開いた。

「大暴れしてやろう。二人で衛兵達を相手に。それこそ囚われている人の事なんか気にしていられないぐらい盛大に。そしてそのまま奴隷商人を捕まえる。俺一人じゃ無理だったけど、君がいるなら可能だ。君は“あの”エストレーラ帝立騎士士官養成学校の卒業生なんだろう？」

そう言っ^てエクレールが見せたのは、悪戯っぽい子供のよう^な笑みだった。

警笛は未だ鳴り響いている中、イリヤにはその笑顔がひどく場違いに映った。

そのまま不敵な笑みを崩さず、エクレールは言っ^つ。

「自信はあるかい？」

エクレールには、答えなど判りきっていただろう。それを感じ取り、イリヤはそのままの答えを返す。

「当然です」

「敵の数は？」

「さあ、細かいところまでは何とも。ただ屋敷の規模から考えると六十人から七十人前後ってところだろうね」

壁に張り付いて身を隠しながら、二人は窓の外の様子をうかがう。屋敷の庭には今、大勢の兵士が集まってきていた。既に三十名前後と言ったところか。

いずれも屈強そうな男たちで、装備は充足している。動きが機敏なところからも、高い水準の実力を有している事が窺えた。

しかし、不意にエクレールが呟く。

「妙だな……」

「何がです？」

「連中の行動だ。どうしてもすぐに収容所の搜索と警備の強化をしない？」

怒声が飛び交い、殺気が充満しているのが感じられる。だが一目散に東棟に駆けつけてこない事が疑問に感じられた。

イリヤの脱走に気付いたから搜索が行われている。

エクレールの侵入が発覚したから搜索が行われている。

いずれにせよ、奴隷として捕らえられている人間を助ける可能性がある以上、普通ならば警備の強化ぐらいはする筈だ。

にも拘らず、なぜか衛兵達は庭に集まって動く気配がない。

その様子を窺いながら、エクレールは虫の知らせとでも言うべき嫌な予感を感じていた。

「いったい何をする気だ……」

「何をするつもりにせよ、私達にあまり考えている時間はありません。行きましよう、エクレール」

「……ああ、了解」

不承不承ではあったが、それでもエクレールは頷いて返す。

懷に忍ばせた手を抜き出すと、そこには指の間に挟むようにして三本の試験管が握られていた。

中に入っていたのは何れも目が痛くなるような極彩色の液体で、聞かずとも口に入れていい物でない事は判る。

「……それはいったい何なんですか？」

「飲むかい？」

「飲みません！」

エクレールの冗談にイリヤは柳眉りゅうびを逆立てる。

しかし彼は柳に風といった風に苦笑するだけだった。

それでも不意に表情を改めると、彼は手にした試験管を見せ付けるようにしてみせる。

「このまま物陰に隠れながら移動して、奴らの近くまで来たら同時に駆け出そう。そして俺が先に攻撃を仕掛ける。この魔法薬で爆発を引き起こすから、君は動揺する敵の制圧を。さっきから指示を飛ばしている奴がいるが、奴が恐らく頭目だろう。俺が敵に痛手を与えたうえで、君が頭を潰す。いいかい？」

イリヤは無言で頷いて返した。

エクレールはそれを確認し、二人は衛兵の目を忍ぶようにして収容所から庭の茂みへと迂回する。

「おい、お前ら！ はやくカニス・デイルスを連れて来い！ もたもたすんな！ さっさと走れ！」

近くまで来ると、聞き耳を立てるまでもなく怒号は二人の耳へとハッキリ聞こえてくる。

カニス・デイルスという単語を耳にして、エクレールは得心がいったとばかりに笑みを零す。

「カニス・デイルス軍用犬を使つて侵入者を見つけるつもりって事か。なら、なおさら先手を打たせてもらわないとね！」

その言葉とともにエクレールは駆け出し、イリヤもそれに追従した。

緑の芝生を爆ぜ飛ばすように駆け抜け、二つの人影が集団に突っ込むのはそれこそ一瞬だった。

ちんにゅっしや突如現れた闖入者の姿に、衛兵達の目がギョツと見開かれる。

だが彼らのそんな反応など、エクレールは齒牙にもかけない。手にしていた魔法薬の試験管を空へと放り投げると、彼はただ一言、力ある言葉を告げる。

「イグニス！」

瞬間、一面が白い光に塗り潰された。

耳を劈くような爆破音。

そして焼けつく熱波。

それらを伴い生じた暴風は、容赦なく辺りを薙ぎ払っていた。

その光景にイリヤは一瞬息を呑む。

衛兵達は突然の襲撃に慌てふためいていた。

完全な奇襲によってその数を半分以上に減らしたこと。

そして何より、爆発と言う見た目にもインパクトの大きい攻撃手段。それらは男たちの判断能力を奪うには十分であり、そして統制のとなれなくなった有象無象など、イリヤにとって何の障害にもなりはない。

柄を握る力をさらに強め、地を蹴る足に指令を下す。

曰く、誰よりも疾く戦陣を駆け抜けよ。

目標は目の前にいる男。

周囲に指令を飛ばしていた、恐らくは集団のリーダー。

男は狼狽するだけの集団にあつて尚、僅かではあるが冷静に指示を飛ばしていた。

だが周囲に気を取られたがゆえに、接敵した少女の姿に寸前まで気づかない。

そして男が気づいた瞬間。

「あああああッ！」

轟いたのは少女の裂帛^{れっぱく}の叫び。

振り下ろされたのは重厚なる鉄の一撃。
袈裟^{けさき}斬りにされた男は驚きに眼が見開かれたまま、声を上げることもなくその場に崩れ落ちる。

だがその姿を一瞥^{いちへつ}すると、イリヤはその場で勢いよく身を翻^{ひるがえ}し、そのまま背後へと剣を振り上げた。

「——がつ!？」

男の苦悶の声が漏れ、干戈を交えた甲高い金属音が鳴り響く。

電光石火の出来事に呆然とする他の衛兵達と違い、唯一人この事態に対応した男がいた。

しかし彼^{ひが}我の実力差までは見抜けなかったのだらう。

イリヤ目掛けて振り下ろした剣は唯^{ただ}の一撃でその手を離れ、遙か彼方へと弾き飛ばされていた。

男の手を離れた剣がくるくると回りながら放物線を描く。

そして芝生の上に音もなく転がると同時、尻餅をついた男の首筋には、氷のように鋭く冷たい、血に塗れた切っ先が突きつけられていた。

「武器を捨て投降すれば命は保証します。今すぐ剣を収めなさい。さもなければ——斬る!」

少女の鈴の音のように冷涼な声が響く。

それは目の前の男だけでなく、周りにいる衛兵全てに向けて放たれた威風堂々たる宣言だった。

「すごいな……」

漏れ出たのはただただ感嘆する声。

その迫力に、エクレールは素直に舌を巻いていた。

小物を相手にするならば、彼^{ひが}我の力の差を見せつけてやるのが手っ取り早い。

それがエクレールの出した結論だった。

しかし今回の奇襲劇の絵を描いた彼でさえ、まさか此処まで図に当たるとは思ってもいなかった。

イリヤの剣は苛烈にして鮮烈。

見る者の目を奪い、釘づけにする何かがあった。

それは味方の心を奮わせ、敵の心を^へ押し折る何か。

爆炎が煌々と煌めく中心において、その所作には美しい恐ろしさがあつたのだ。

そしてそれは、この場にいる男たちの戦意を喪失させるに十分すぎた。

「まだやるって言うなら、今度は俺が纏めて薙ぎ払おう。大人しく武器を捨てて、さっさと何処へなりと逃げる事をお勧めするよ」

ダメ押しとも言える言葉と共に、戦場において不気味にしか映らない笑顔を浮かべ、エクレールは再び懐から試験管を取り出す。

それを見た瞬間、衛兵たちの間に動揺が広がり、彼らは武器を捨てるや否や蜘蛛の子を散らしたように逃げ出していた。

逃げ惑う衛兵たちを追おうともせず、エクレールはイリヤの側へと歩み寄る。

「お見事」

「別に大したことはしていませんよ」

エクレールの投げかけた贅辞に、イリヤは微笑で返す。

その表情が何処か得意げで、エクレールは思わず頬を緩めていた。

しかし一瞬で表情を再び引き締めると、彼女は未だ逃げずにいた一人の衛兵に声をかける。

目の前で剣の切っ先を突き付けた、先ほどの男だった。

「貴方は逃げないのですね」

「……こちらら傭兵稼業で食ってるんだ。死ぬ覚悟は出来てるっつうの」

「しかし傭兵にとって最も重要なことは生き残ることだ。無駄に命を散らすこともない」

イリヤはそう言っつて剣の切っ先を引く。

傭兵の男は信じられない者を見るような目で彼女を見ると、大きな溜息を零す。

「甘いな、アンタ……」

「どうでしょう。いくら私でも、武器を持って襲いかかってくる者には容赦はしませんよ？」

「そんな奴らに容赦するなら、それは“甘い”んじゃないかただの“馬鹿”だろうが……」

苦々しげに男は呟き、顔をそむける。

それからぼつりぼつりと、独白するように言葉を続けた。

「サラザールなら本館の二階にいる。とつとと捕まえてこい……」
「サラザール？」

「オーガスト・サラザール。私を雇った奴隷商人ですよ……」

疑問符を浮かべるエクレールに、イリヤは渋面を浮かべて名を呟く。

言うまでもなく、蛇蝎だかつのごとく嫌っているのだろう。
彼女の性格を鑑かんみれば詮無きことだ。

得心がいったばかりに、ふむ、とエクレールは指先を唇に当てる。
そして再び男へと視線を向けた。

「しかし、またどうして居場所を教える？ 傭兵なら、守秘義務つてやつぐらい知ってるだろうに」

「いくら契約したからって、ギルドの討伐部隊を撃退するのに勝手に化け物を放つような野郎にいつまでも付き従ってられねえよ。現に今だって、撤退準備の最中だったぐらいだしな……」

「討伐部隊？ いや、待て。それより化け物つて——」

その時だった。

人ものとは思えない雄叫びが大気を揺るがし、エクレールの声を掻き消した。

「今のは——ッ!？」

イリヤは剣を構え、音の正体に向かい直ってジッと見据える。
その後ろで、エクレールは疲れたように溜息を洩らした。

『おそらく、最初から術式に破損が生じていたんだろうけど……これって普通はトロールとかを拘束するのに使う物だよ？ それを僅

かとはいえ緩ませるって、君って本当に人間かい？」

『私がトロールに見えるところでも？』

つい先ほどの会話が彼の脳裏を過る。

わざわざ人を拘束するのに取り寄せる必要は無いようなものを、奴隷商・サラザールが持っていた理由。

パズルのピースが音を立てて噛み合い、彼の中で一つの絵になる。

重厚な音ともに地面が揺れる。

それも一度ではない。

不規則ではあるが断続的に、それはまるで足音のように辺りに鳴り響いていた。

そして、そいつは現れた。

筋肉質な肉体。

禿げ上がった頭皮。

不揃いな歯。

常に悪臭漂^{ただよ}う涎を垂らした、醜悪な巨人。

この大陸に住まう人々から畏怖と嫌悪を持って、“地底^{トロール}の人々”と呼ばれる者が其処にいた。

第三節

剣を構えた少女。

その隣には尻餅をついたままの若い傭兵。

そして、二人に比べれば少し離れた位置に立ち尽くす黒尽くめの男。

トロールは三人の事をまじまじと見つめていた。

右手には木で出来た棍棒を握りしめ、左手には何かを握りしめていた。

その場にいた誰もが動けずにいた。

彼我の距離はおよそ二十メートルといったところか。

目の前に現れた物の意味を理解する為には、それだけ時間が必要だった。

それは現実の時間に換算すれば本の刹那の事だっただろう。

だがそれは、エクレールとイリヤが後手に回るにはあまりに十分すぎた。

「ヴォオオオオオオオオオッ！」

それはまさに獣の咆哮だった。

大気を震わす雄叫びをあげ、トロールはその手にしていたものを投げつけてくる。

それはイリヤ目掛けて飛んできた。

彼女はそれを視認すると、慌てて横へと跳ぶ。

「——ッ！」

飛んできたものが『どちゃっ』という水気を含んだ音を立てて芝生を転がる。

それは握り潰され、血に塗れてはいたが、かるうじて犬のような生き物だったという事だけは識別できた。

それはカニス・デイルスの成れの果て。

壮絶なまでの膂力^{りょりょく}で握りつぶされた死体に怖気が走るのを感じると同時。

「眼を逸らすな、イリヤ！」

イリヤの耳に、エクレールの怒声にも近い叫びが届く。

その声にハッと我に返った。

イリヤが身を翻してトロールへと振り返ると、そこには眼前に迫った巨大な木塊。

あれだけあった彼我の距離を、化け物は巨軀にも拘らず一息に跳び込んでいた。

巨体が宙を舞い、痛烈な一撃が振り下ろされる。

世界の全てがコマ送りに動く。

音が消えたような錯覚。

指先一つまともに動きはしない。

されど意識は明瞭^{めいりょう}であり、イリヤは事の顛末^{てんまつ}を正しく理解する。

ああ、自分は死ぬのだ、と。

後手に回り反応も遅れた彼女に、その一撃を躲^{かわ}す術^{すべ}などある筈もなかった。

——しかし、

「テッラ！」

その時、力ある言葉が響く。

イリヤの目の前に一枚のカードが現れ、それと同時に、轟！と大地が揺れる。

瞬間、牙を向いた土塊が槍となって突き出された。

「ゴガアアアアアッ！？」

柱と見まがうばかりの巨大な土槍が、トロールの肩を深々と貫く。生臭い血さびの雨が降り注ぎ、大地に深紅の溜池を作り出す。

その紅色を瞳に映しながら、イリヤは呆然とする。

「何をしている！今のうちに早く退け！」

目の前で繰り広げられた光景の凄まじさに思考を掠め取られていたイリヤ。

だがその一言に彼女の瞳には再び光が灯り、剣を握る手には力が漲る。みなぎ

トロールは再び振りかぶっていた。

痛みに疼く左の肩から血を滴らせたまま、右手に握りしめた無骨な棍棒を振るう。

イリヤは思う。

その動作の何と緩慢な事か、と。

先に踏み込み、切り込むも容易い。

避けるだけならば兎戯にも等しい。

今度は体が動く。

ならば、幾らでもやりようはある。

瞬時に幾重も枝分かれした結末をシュミレートし、彼女は判断を下した。

彼女が出した結論。

それは、その一撃を受け止める事だった。

「あああああああああああああつ！！！！！」

腹の底から絞り出すような氣迫と共に、劍光煌めき銀影が疾る。はし

まさに刹那の出来事だった。

「嘘だろ……？」

目の前で起きた光景に、傭兵の男は力なくうわ言のように呟く。

それは絶対にあり得ない光景だった。

迫りくる非常識な力の塊を、華奢な少女の細腕が叩き斬った。

鈍重な木塊と鋭利な鋼剣。

その二つが互いに一点で交差する。

そして次の瞬間には、断ち割られた棍棒の先端が宙を舞っていたのだ。

しかし続けざま、更なる言葉が響く。

「ウエントウス！」

再び力ある言葉が形を成す。

エクレールが掲げた新たなカードが光に包まれ炸裂する。

それは銀色の風だった。

辺り一面に吹き荒れる暴風。

だが次の瞬間には掲げた彼の手元に渦をなして集い、一条の弾丸となり空を駆ける。

目指すは武器が空を切り体勢を崩したトロールの顔面。

寸分変わらず狙い済ましたそれは化け物の鼻っ柱に深々と突き刺さると、乾いた衝撃音を響かせながらその巨体を吹き飛ばしていた。

傭兵の男は啞然とする。

トロールといえば討伐するのに、一般的に国軍の中隊規模の戦力が必要とされるような化け物だ。

それを生身の人間がたったの二人で圧倒している光景は、彼の目には異様にしか映らなかった。

だが呆然とする男の耳朵じだに、つい先ほど耳にした凜とした声音が響く。

「何を呆けているのですか！ 此処は危険です。貴方は離れていてください！」

少女の声に正気に立ち返った傭兵の男は、それでも言われた言葉の意味が理解できずにいた。
なぜこの女は、敵であった俺の心配などしているのだろうか。

しかしその疑問も、少女の一言で氷解する。

「言った筈です。武器を捨て投降すれば命は保証します、と」

それは信じられない言葉だった。

たしかに少女は言った。

だがそれはあくまでも、少女が男に危害を加えないという意味だった筈だ。

しかし少女は真面目だった。

それこそ糞がつくほど大真面目に、少女は言う。

「約束は守るものですッ！」

威勢よく剣を構えなおし、イリヤは男を守るようにしてトロールとの間に立つ。

纏うはその心根を反映したような毅然とした美しさ。

その後姿を見つめながら、男は悟った。

今の一撃、少女には避けるという選択肢もあつた筈だ。

なのにも拘らず、わざわざ少女が棍を避けずに斬り飛ばした理由が、すぐ側にいた自分に有つたのならば……。

「やっぱりアンタは馬鹿だよ。大馬鹿だ……」

喉が詰まつたように苦しさがかみ上げ、上手く声を出せなかったかもしれない。

本当はもつと別の言葉を言いたかつたはずなのに、彼にはそう強がつて返すことが精一杯だつた。

何かを痛感したような沈痛な響きを声音に寄せ、男は面を上げることなく走り去る。

そして少女の下を男が去ると同時、彼女の隣には入れ替わるように黒尽くめの男が立っていた。

「まさかアレを叩き斬るとは思わなかつたよ」

「そちらこそ、あのカードは何ですか。カード一枚でいくらでも強力な魔法が放てる術があるなど聞いてませんでしたよ？」

「“切り札”はここぞという時に切るものだからね。……それに、そう便利だけの代物でもないんだ」

「食えないお人だ」

「食べても美味しくは無いだろうねえ……」

掌に数枚のカードを扇状に広げて見せながら、彼は相変わらずの優しい笑顔を見せる。

その場違いな笑顔にも、イリヤは既に慣れ始めている自分がいることに気づいて可笑しくなつた。
慣れとは恐ろしいものだ、と。

「しかし意外だったね。まさか君がお咎めも無く彼を逃がすとは思わなかった。なんとというか君の場合、悪・即・斬！ というイメージがあっただけど」

「言った筈です。約束は守るものだ。私は戦闘狂ではありませんし、戦う必要のない相手に剣を向けるようなことはしません。それに彼自身はそれほど悪性の人間にも見えませんでしたし……。私の裁定に納得いきませんでしたか？」

「いや、むしろ賛成派だね。個人的な感想だけど、彼自身は結構好感が持てそうな感じでね。前途ある若者の未来がこんな所で潰えるほど悲しいことも無い。俺は悲しいことが嫌いなんだよ」

「偶然ですね。私もです」

互いに笑みを浮かべながら、男女はそれぞれ得物を構える。

結局、二人とも根はお人好しという事だった。

「さて、そろそろか……」

不意に表情を引き締め、エクレーは態度を切り替える。

そしてそれはイリヤも同じだった。

互いの距離は十メートルといったところだろうか。

吹き飛ばされたトロールは、再び立ち上がろうとしていた。

深々と串刺された筈にも拘らず、肩口の傷はもう塞がり始めている。

大砲の砲弾のような衝撃を顔に受けた筈にも拘らず、その様子からは堪えた素振り（そぶり）はまるで見えない。

「俺が奴の隙を作る。君はその隙に奴を斬り伏せてくれ。ああ、ただし絶対に後ろを振り返らないでくれよ？」

「その一言で、何をするつもりかだいたい理解できました……」

「古来より単純だからこそ強力であり好まれるものもあるものだよ」

そう言ってエクレールは一枚のカードを引き抜く。

——そして次の瞬間。

「ギルドや国軍が苦戦する最大の理由がああ常識外れの生命力と再生能力だ。油断はするな！」

その言葉とともに、弾かれたように二人の時間は動き出す。

イリヤは駆けた。

大地を爆発させんが如き力を両脚に注ぎ込み、弾丸が風を切るように彼女はトロール目掛けて跳ぶ。

エクレールは一枚のカードを空へと放った。

やる事は変わらない。

ただいつも通り、力ある言葉を宣言するだけだ。

「ルークス」

彼は静かに宣言した。

その時、一瞬ではあるがトロールと目が合うのを彼は感じる。

濁ったガラス玉のような瞳は、彼が放ったカードを見据えていた。

瞬間、世界が光に包まれた。

周囲すべての影を吹き飛ばすほどの輝き。

見る者に痛みを与えるほどに暴力的な閃光がトロールを襲った。

その巨体が苦痛にのたうち回る。
握りしめた拳を振り、両の腕が轟かいな！ と風を切って振り回される。
そしてその一撃が、少女を襲った。

「……………」

だがイリヤは焦らない。

彼女にはその動き全てが緩慢なものに見える。

自らを目がけて振り下ろされた拳骨に、彼女はただ一撃を見舞う。

腕が一本飛ぶ。

血雨の中を彼女は変わらず駆け抜ける。

その所作に無駄は無く、剣を振えどその速度は落ちない。

彼女が懷に飛び込んだのは一瞬だった。

目が合う。

見下ろす巨人の眼はおそらく何も映してはいないだろう。

それでもその瞳には、確かに自分の姿が映っているのを彼女は見た。

イリヤは静かに告げる。

「これで仕舞いです」

その言葉と共に、すり抜けざまに放たれた横薙ぎの一撃が、トロールを上下に両断する。

辺り一面に血を吐くような獣の咆哮が響くが、それも一瞬だった。
大地を揺らすほどの重量感ある音を轟かせながら、その体は崩れ落ちていた。

その姿を一瞥すると、イリヤはホッと安堵の息を漏らしていた。

そして白刃に纏わりついたぬめりとした赤い液体を振り払い、彼女が剣を鞘へと納めると。

「何やってるイリヤ！」

「——っ！？」

聞こえた怒声に、彼女は驚き振り返る。

それと同時に、突如彼女の体を衝撃が走った。

「あぐっ！！」

人間のものではありえないほど巨大な掌に握りしめられ、イリヤは苦悶の声を上げる。

全身の骨が軋み、身体が悲鳴を上げる。

手にしていた剣は衝撃で落としてしまい、そもそも現状では身動きが取れない。

ただ一つ、額に脂汗を滲ませながら苦痛に耐える彼女に出来る事は、今何が起きているのかをその目に焼き付けること。

彼女の瞳は映しだしていた。

度し難い事に、信じがたい事に、あり得ない事に。

上半身だけとなったトロールは、それでもなお死んではいなかった。瞳に狂気じみた輝きを宿し、声は血が混じってぐもっていた。

だがその膂力りょりょくは未だ健在であり、華奢な少女の体を容赦なく万力のような力で締め上げてくる。

「がつ！　ぐうつ！！」

油断するな。

そう言われた筈なのに、最後の最後で詰めを誤った自分自身の愚さを彼女は呪う。

トロールの生命力の高さについては知っているつもりだったが、まさかこれほどまでとは思ってもよらなかった。

全身に力を込め少しでも抵抗を試みるが、振りほどくことはかなわない。

彼女自身、力には自信があっただが、それでもさすがに化け物相手に渡り合えるほどではない。

このままでは握り潰される。

彼女の脳裏に、ついさっき目にしたカニス・デイルスの姿が浮かぶと同時に。

「グレイデウス！」

その言葉とともに、イリヤは風が一条吹き抜けたのを感じた。

そして次の瞬間、彼女の瞳に映りこんだのはトロールの手に突き刺さった一振りの剣だった。

「ギイツ!？」

「——ッ！」

鋭い痛みが走るのを感じたのか、トロールの握り締める力が一瞬だけ緩む。

その刹那、イリヤは手の甲に突き刺さった剣を引き抜き地上に降り立った。

疲弊はしていた。

痛みはあった。

だがそれでも、彼女は前を見据え、剣を振う！

「いやああああああああっ！！」

裂帛れっぱくの気合とともに一閃。

放たれた剣撃はトロールの首を刎ね飛ばし、岩と見まがうような頭が庭を転がっていく。

荒く息を吐く少女。

大地に倒れ伏した巨人は、今度こそ動かなかった。

第四節

大地に倒れ伏した巨人の骸。

それを目の当たりにして、イリヤは深く息をする。

頭を撥ね飛ばされて生きていける生き物など聞いた事が無い。

しかし、それでもまだ僅かな不安を拭いきれず、彼女は残心もそのままに緊張を解こうとはしない。

だが、そんな彼女に声が掛かる。

「大丈夫だ、イリヤ。もう死んでる……」

気づけば横に立っていたエクレール。

彼は心配そうな表情を浮かべたまま、イリヤの隣りに佇んでいた。たたず
その言葉を聞くと、不意にイリヤの体から力が抜けた。

「——っ！」

「イリヤ!？」

剣を杖にして前のめりに倒れる少女の体をエクレールは支える。

その体は羽毛のように軽く、片腕だけで容易に支えられた。

つい今しがたまで、怪物相手に激闘を繰り広げていた者とはとても思えないほどだった。

「申し訳ありません……。少し気が抜けたようです……。すぐに回復しますから……」

「無茶を言うものじゃないよ。あれだけの力で握りしめられたんだ。骨や内臓にダメージが来てないと思える方がどうかしてる」

エクレールは静かに、そして諭すように言う。

トロールとの戦いで負ったダメージは大きかった。

しかし、そんな事など関係無いとばかりに再び気力で立ちあがろうとする少女をエクレールは諫める^{いさ}。

事実、イリヤの全身はズタボロだった。

見た目にもあちらこちらに内出血の跡が見受けられたし、骨にひびが入っているのか呼吸も苦しそうにしている。

満身創痍の様相を呈している少女に、エクレールは告げる。

「残りは俺がやっておく。君はここで休んでなさい」

その言葉を聞いた瞬間、イリヤの瞳が驚きに見開かれていた。

そして次の瞬間。

「ふざけないでください!」

「落ち着くんだ。興奮すると体に障るぞ」

「落ち着いてなどいられるものですか! 私はまだ戦えま——

——ッ!」

イリヤは怒りを抑えきれず、エクレールへと思いの丈をぶつける。だが、言葉の途中で苦悶の表情を浮かべると、脇腹を抱えるようにして蹲っていた。

その様子に、エクレールは小さく溜息を零す。

「言わんこっちゃない。君は君が思っている以上に消耗し、傷ついているんだ。今は休んでなさい」

「しかし……」

イリヤもエクレールの気遣いは重々理解していた。

しかしどうしても、彼女は自身の手でサラザールに引導を渡したかった。

それが我儘のような意地だということも理解したうえで。

エクレールは暫し逡巡する。

瞳はイリヤを見つめたまま、彼は手を口元へと当てて思考していた。

やがて、一つの結論を出す。

「なら、これを飲むと良い」

「……………なんですか、これは？」

そう言っただけで差し出された物を目にして、イリヤの頬がひくひくと引き攣る。

それはまたしても試験管に入った魔法薬だった。

色は暗緑色で、相変わらずこぼこぼと音を立てながら泡立っており、イリヤは一瞬何の冗談かと耳を疑う。

だがエクレールは至って真面目に、優しい笑みを浮かべながら言う。

「通常は魔術などを使う場合、燃料となる魔力は術者本人の『生命力』をベースとして、世界に存在する『存在力』を混ぜ合わせて作り上げる。これらは非常に似通った性質を持つからこそ融和させられるんだ。そして、そうして出来上がった魔力に詠唱などを加えることで意味を持たせ、一つの奇跡として顕現させるのが魔術というものだ」

「それぐらい知っています……。けど、それとこの人の飲むべき物とは思えない物体を飲むことに何の関係があるというのですか？」

「関係大有りだよ。魔法薬というのは、いくらか系統を分けて分類

してこそいるものの、本質的には純粹な魔力の塊だ。だからこそ複雑なプロセスをすつ飛ばして魔術を行使できるんだけど、それは今は関係ないからおいておく。ともかくだ。ここで大事なのは人間の持つ『生命力』と世界の持つ『存在力』は非常に近い存在だということだ。魔法薬とは即ち魔力の塊。魔力とは即ち生命力の塊。人間の生命力と同質のものを摂取するんだ。骨に入ったひび程度なら問題なくすぐに完治する筈だ」

懇切丁寧に語られるエクレールの魔法薬講座を、イリヤは一言一言反芻し、十二分に咀嚼し、吟味する。

なるほど、たしかにそれならこの場でイリヤが抱えている問題を解決できるだろう。

しかしながら、その見た目はあまりにも精神衛生的によろしくない。どうみても毒物にしか見えないこの暗黒物質を飲めと言ってくる目の前の男が、イリヤには悪魔か何かに見える気がしていた。

「これは……、本当に飲んでも大丈夫なのですか？」

「うん、効き目は保証するよ。まあ、見た目はちょっとアレだし、味に至ってはもっとアレだけど……」

恐る恐る訊ねるイリヤに、エクレールはそう苦笑して返す。

しかしその言葉に意を決したのか、イリヤは静かに差し出された試験管を手にとると、まじまじと中身を見る。

そして試験管のふたを開けると、むわっと形容しがたい臭いが漂ってきた。

額に脂汗が滲み、目眩がするような錯覚がする。

今まで様々な危地難局を乗り切ってきた彼女だったが、これを飲むぐらいなら再びトロールと戦えと言われる方がましな気さえしていた。

それほどまでにこれを飲むには勇気が必要だった。

彼女は思う。

もしこれを迷わず飲む奴がいるなら、そいつは間違いなく勇者だろう、と。

呼吸を一つ。

それと同時に、彼女はそれを勢いよく呷^{あお}り飲む。

——瞬間、彼女の舌が筆舌に尽くしがたい味を認識していた。

「~~~~~ッ!？」

声にならない叫びをあげる。

胃液が逆流するどころの話ではなかった。

イリヤは口に含んだ液体を吐き出さないよう、必死になって手で口を抑える。

不味い薬といえば苦いとか臭いとか大抵そんなものだが、この薬は違うのだ。

苦いうえに臭い。

そしてなにより、とにかく痛いのだ。

まるで強酸性の液体を飲んでるような気分であり、文字通り喉が焼けつくようにさえ感じられていた。

それでもイリヤは如何にかそれを飲み下す。

全てはサラザールに自ら引導を渡すため。

その鋼の如き一心で、彼女は氣力を振り絞った。

「これで……良いのでしょうか？」

疲労困憊といった感じに、彼女は言葉を吐く。

我ながら良く耐えたものだ、イリヤは内心自画自賛したかった。しかし壮絶な苦痛で忘れていたが、段々と落ち着いてくるとともに自らの肉体にとりたてて変化が生じていない事に彼女は気づく。そしてエクレールから何の反応もないことにも。

嫌な予感と共に訝しんだ彼女は、ゆつくりとエクレールの方へと振り返る。

そこにあつたのはエクレールの何とも言えない微妙な表情であり、彼は曖昧な笑みを浮かべたまま言った。

「いや、まさか本当に飲むとは……」

「エクレールッ！」

瞬間、彼女は体が痛むのも忘れて剣を大きく上段に構えていた。それを見て、さすがのエクレールも顔を蒼くして慌てて後退る。あとずさ

「わあっ、待て待て！ 確かに本当に飲むとは思っていなかったけど、効果が無いとは言っていないよ！」

「本当でしょうね……」

ギロリと射抜くような視線で睨まれ、エクレールはただただ萎縮するしかない。

両手を前であわあわと振りかざす様は、とても情けなく見える。

しかしながら、この小柄なくせにすさまじい凄みを見せる少女に睨まれて、恐怖を感じない人間は稀といえるだろう。

イリヤは一度矛を収める。

エクレールの言葉を信じて。

そして、彼女は言う。

「エ！　ク！　レ！　エ！　ルウウウウ……！」

ズキズキと相変わらず痛む脇腹を押さえつつ、少女はこめかみに青筋を浮かべながら剣に手を掛ける。

そのトロールが可愛く見える形相に、エクレールは本気で顔を蒼くしていた。

首筋に当たった白刃の冷たさに背筋が凍る。

「いや、待つて待つて！　本当に効果がある筈なんだって！」

「では私の体が未だに痛む理由を教えてくださいませんか？」

「それは……」

エクレールは言葉に詰まる。

事実、彼にとつてもこの事態は想定外としか言いようが無かった。確かに味は酷いが、効果に関しては確証していただけに狼狽えるしかない。

すると、そんな彼の同様を感じ取ったのか、イリヤの表情からふっと影が消える。

「判りました、信用します……。ここでこんな意味の無い嘘をつく必要も無いですし……」

「あ、ありが——」
「ただし！」

ホッとエクレールが安堵の息を漏らそうとして、それをイリヤは力強く遮る。

「おぼえておいてくださいよ、エクレール……」

「……俺はサラザールの下に向かうから、君はここでおとなしくしておくんのだ。いいね？」

「あ！　こら！　待ちなさい、エクレー、っ！」

その言葉は酷く冷たい金属質な響きを持っていた。
血が凍りつくような錯覚を感じたエクレールは、その場にイリヤを残して逃げ出していた。

イリヤもすぐさま後を追おうとする。

しかし、さすがに体のダメージも限界だったようで、肩膝をつく諦めたようにため息を一つ零していた。

「どの道このざまでは、迷惑をかけるだけ、ですか……」

遠くでは混乱の中、我先にと逃げ惑う傭兵達の声が聞こえる。
彼らのまたがる馬の嘶き^{いなな}を、少女はぼんやりと聞き流していた。

ふと、彼女は言う。

「いえ、まだです……。私は、私に出来ることをしましょう……」

第五節

人気の無い整然とした廊下。

されど壁一枚を隔てた外は、未だ馬の嘶いななく喧騒だ。

二つの世界を分ける壁一枚の内側において、エクレールはサラザールを探して東奔西走する。

その表情は真剣そのもので、中庭でイリヤに見せていた彼の表情とはまるで別人のようだった。

「違う、ここでもない……！」

これでいったい幾つ目の扉だっただろうか。

扉をそつと押し開き中を窺うと、彼は苦々しげに舌打ちをする

だが落胆の表情も一瞬。

彼は再び前を見据えると、次の部屋を目指して駆け出していた。

トロールから助けた傭兵の男の話が真実なら、サラザールの部屋は二階にある。

しかしながらこの屋敷の広さは半端ではなく、彼は未だ標的を見つけることが出来ずにいた。

普段は飄々とした掴み所の無い男に見える彼にも、やはり焦燥しんやうはある。

大切な教え子かどわを拐かした卑劣漢を、このまま野放しにするつもりなど毛ほども無かった。

しかし、サラザールは一向に見つからない。

部屋も半分ほど調べ、エクレールは傭兵の男の言葉の真贋しんがんを鑑みる。

人を見る目には自信があった。

根拠は強いて言えば勘だったが、彼には傭兵が嘘を吐いていないという確信にも似た感覚があった。

男が嘘を言う理由など考えうる限り幾つもあったが、最後に彼は自身の勘を信じることにした。

時には論理的な思考よりも、こういった直感的思考が役に立つことを彼は知っていた。

そして、それはこの時においても正解だった。

「見つけた……！」

ひときわ目立つよく言えば豪華、悪く言えば悪趣味な装飾の扉の向こう側に、彼は見つけた。

肥え太った巨体を揺らし、慌てたように鞆へと金を詰め込んでいる男の姿。

名は問うて無い。

だが彼は直感で確信していた。

この屋敷において兵士とは思えない出で立ちをしたこの男こそが、全ての元凶だと。

部屋の様子を窺うことを止め、周囲を警戒する。

思考は一瞬。

部屋に踏み込み、男を取り押さえるまでをシュミレートし、彼は確信する。

サラザールを取り押さえるのは容易である、と。

商人ひとりを武力鎮圧するなど造作もない。

しかし、それもひとつ条件が変われば話が違ってくる。

彼が中の様子を覗き見た時、視界に飛び込んできたのはサラザールのみではなかった。

「パティ……」

視線を伏せ、瞳をギュツと硬く閉じ、エクレールは一言その名を口にする。

パトリシア・ハーヴェイ。

エクレールの教え子で、明るい笑顔が良く似合う少女だった。

そんな少女が、部屋の中サラザールの隣にいた。

彼女の今の格好は肌の露出の多い、特殊な趣向の持ち主が着せたであろう意匠の衣装であり、おそらくはサラザールがどういった目的で少女を自室へと呼び寄せたのかを理解して、エクレールは血が沸き立つような激情に駆られていた。

しかし、それを押さえ込む。

歯が割れんばかりに食い縛り、うつすらと血が滲むほどに拳を握り締める。

今すぐ飛び込んで、パティを助けてサラザールを取り押さえられる確立を彼は計算する。

五分、いや下手をすればそれ以下の確率だろう。

室内に踏み込んだ瞬間、サラザールは確実にこちらに気づく。もしそうなれば、やつは確実に少女の身を盾とするだろう。

ならば、

サラザールがパトリシアを盾にするよりも先に殺す。

「いや、駄目だ……」

袖の内側から掌へと投擲用のナイフを滑り降ろしながら浮かんだその考えを、エクレールは否定する。

サラザールを殺すことに躊躇いがあるわけではない。

彼はそこまで自分のことを聖人君子だとは思っていない。

しかし、サラザールには生かしておく価値があった。

奴隷市場における奴の立ち居地。

それを鑑みれば、奴が持っている情報の価値は計り知れない。

流通ルート、顧客リスト。

それらを掌握すれば、今後起きるであろう悲劇、そして今現在起きているであろう悲劇を食い止めるのにどれだけ有用であるかは、今更語るべくもない。

葛藤。

目の前の少女を救い出したい衝動を抑え、エクレールが選んだ選択肢は“待機”だった。

機を待つ。

ひたすらに苦渋だった。

だからこそだろう。

「おい、貴様そこで何を――」

声をかけられるまで、エクレールが接近に気づかなかったのは。

「――ッ！」

「じっ!?!」

エクレールの行動は、シンプルかつ迅速だった。

手にしていた刃物を、衛兵の喉笛めがけて放つ。
それだけだ。

一撃で絶命した衛兵は、だらりと四肢を投げ出して倒れ伏す。

一瞬だった。

しかし、その一瞬はあまりに致命的だった。

「誰だ！　そこに誰か居るのか!!」

部屋の中から聞こえてきた怒声に、エクレールは目を閉じ溜息を吐く。

覚悟を決めて中へと入ると、そこにはパトリシアを盾にするようにして銃口を突きつけたサラザールの姿があった。

エクレールは考える。

如何にしてこの事態を乗り切るか。

彼の弾き出した答えはこうだった。

「サラザール、お前を殺しに来た」

冷たく言い放つ。

瞳からも光彩を消し、そこに一切の感情を感じさせない。
もともと人質など意味がないことを教えてやればいい。
それだけだ。

しかし。

「助けて、先生！」

これが問題だった。

知らない大人に攫さらわれて、さぞ怖かっただろう。
そんな子供に見知った人が目の前に現れて、演技に合わせるとい
方が無理な話だった。

パトリシアの言葉を聞いて、サラザールは嫌らしく顔を歪める。

「動くな。動いたらこのガキの頭を――」

「吹き飛ばせばいい」

その言葉に、驚きの表情を見せたのはサラザールだけではなかつ
た。

男の腕の中で、幼い少女も信じられないような表情をしていた。

エクレールにとって、パトリシア・ハーヴェイは大切な教え子だ。

彼女を助けることは、彼にとってもっとも重大な目的と言えた。

にも拘らず、彼は言う。

エクレールは然して興味もないという風に言葉を続ける。

「お前がその子の頭を吹き飛ばせば、俺はその瞬間、貴様の首を掻く。それが嫌なら今すぐその子から離れる。そうすれば見逃してやる」

「ふ、ふざけてるのか！　そう言われて『はい、そうですか』と大人しく―――って、寄るんじゃねえ！」

「さあ、決めろ。決めるのはお前だ」

サラザールの言葉などに一切耳など貸さず、エクレールは一歩二歩と前に出ることをやめない。

彼の掌の中では、鋼の刃が鈍い光沢を放っていた。

「―――ッ！」

服の袖から滑り落ちてきた短剣を目にして、サラザールは息を呑んでいた。

狭い部屋の中だ。

互いの距離が縮まるのに十秒と掛かりはしないだろう。

その短い時間の間に、サラザールは結論を出さねばならない。

一、人質を解放して見逃してもらう。

二、人質を撃ち殺して目の前の男に殺される。

三、――。

「近寄るなって言ってるだろ!!」

――男が近寄る前に撃ち殺す。

「それでいい……」

エクレールの考えが図に当たる。

サラザールは銃口に向けた。

人質にではない。

エクレールに向けて、だ。

これが何かの思想に殉じた者にならば逆効果だっただろう。
だが相手は自らの命が助かる事を第一に考えている。

ならば必然、人質を殺して自らも死ぬのではなく、選ぶのは目の前の脅威の排除。

それならば、エクレールにも道が見える。

「――ッ!」

引き金が引かれた瞬間、エクレールは身を擦よじっていた。

銃声が一発。

放たれた弾道は彼の頬を掠めてゆく。

間一髪だが、それで充分。

致命傷でなければ、それで充分。

そしてなにより、鉛弾と入れ替わるように刃が飛ぶのにはあまりに充分過ぎた。

「ぎゃッ!？」

サラザールの銃を握り締めていた手を、エクレールの短剣が貫く。

「——ッ、くそッ！」

堪らず銃を取り落としたサラザールに向けて、エクレールは駆け出す。

それに気づいたサラザールは、慌ててエクレールへ向けてパティを突き飛ばしすや否や、荷も持たずに逃げてだしていた。

「——っと。大丈夫か、パティ？」

「先生……!」

その後を追わず、エクレールは突き飛ばされた少女を受け止める。すると腕の中の小さな女の子は、怯えたようにエクレールを見上げていた。

「すまなかった、パティ。怖い思いをさせてしまった……。本当にすまない……」

ぎゅっと抱きついてきた少女の髪を優しく梳^{くしけず}り、そっと頬を撫でる。

しかし、それも一瞬。

瞳に悲しげな色を湛えたまま、男は未だしゃくり上げている少女が

らすぐに手を離していた。

「パティ、君はベッドの下に隠れているんだ。先生は悪い人を捕まえなくちゃならない」

「待って、先生……。一緒に居て……」

「パティ……」

優しく説き伏せるように、彼は名前を呼ぶ。
見上げた少女は、気丈に涙を拭って見せた。

「……はい」

「いい子だ。ありがとう」

本当ならば、まだ側に居てあげたい。

この子の心が休まるまで、抱きしめていてあげたい。

だが、事態がそれを許してくれはしない。

身を引き裂かれるような思いを胸に、エクレールは再びサラザールの後を追った。

「畜生……殺してやる、あの男絶対殺してやる！」

ばたばたと滴り落ちる血を拭いもせず、肥満体の体を揺らして廊下を走る男。

オーガスト・サラザールは馬小屋を目指していた。
そこには彼が逃走用にと用意してある荷馬車がある。

どうしてこうなったのか判らない。
いったい何が原因でこうなったのか。

栄華を極めていた筈の自分の人生に起きているアクシデントに、サラザールは齒噛みをする。

だが、その瞳にはまだ諦観の色は無かった。

拠点はまだ他にもあるし、商品や資金もまだある。

此处さえ逃げ切れれば、再起を図ることは可能だった。

ちらりと後ろを振り返る。

あの黒尽くめの男が未だ追ってくる気配はなかった。

その事にホッと安堵の息を漏らし、サラザールは更に足を速めた。

やがて、彼の馬車が見えてくる。

逃走用なら目立たないようにすればいい物を、サラザールの悪趣味と見栄の所為で豪華に飾り立てられた馬車だ。

「おい、さっさとだせ！」

乗り込むや否や彼はがなり声を上げる。

すると、御者台から返事が返ってきた。

「申し訳ありませんが、馬が居なくては馬車は動きません」

サラザールは聞こえてきた声にギョツとした。

それは女の声だった。

それも凜とした鈴のような声。

「まさかとは思いましたが、これが逃走用の馬車とは……。つくづく趣味が悪いな、サラザール」

「ア、アイゼンバーグ!?」

御者台の覗き窓から見えた顔は忘れようがなかった。

イリヤ・シュヴァルツ・アイゼンバーグ。

サラザールが護衛として雇い、商品として売りさばこうとした女騎士だった。

「万一エクレールが取り逃がした場合に備えての保険のつもりでしたが、ここで張っていて正解でしたね。さて、覚悟はいいですか。

……オーガスト・サラザールッ!」

自分が今どういう状況に陥っているのか理解して、サラザールは慌てて馬車を飛び降りる。

その際に慌てすぎた彼は、足を縛もつれさせて盛大にすっ転んでしまっていた。

「ま、待て! 話し合おう! 欲しいものなら何でも用意する! だから頼む!」

尻餅をついたまま後退おとする男に、御者台を降りたイリヤは一步步ゆっくりと近づいてゆく。

この期に及んで命乞いをする目の前の男が、彼女には酷く卑しく見えた。

心がざわめく。

抑えきれない衝動が彼女を突き動かす。

見下ろし、見下し、イリヤは剣を高く構えた。

満身創痍の身ではあったが、この男一人を消し去るぐらいは出来た。

「ならば――、貴様の命を貰い受けるッ！」

「や、やめ……」

「やめろ、イリヤ！」

今まさに振り下ろそうとしていたイリヤの動きが止まる。

止めたのはサラザールとは違う男の声だった。

「なぜ止めるのです、エクレール！ この男はッ！」

イリヤの後ろにエクレールは立っていた。

たったいま馬小屋に辿り着いた彼だったが、一目で事態を理解していた。

遮二無二に走り続けたにも関わらず、その息は僅かにも乱れてはいない。

しかし、その頬には焦燥の汗を滲ませていた。

「知っている、判っている、理解している。その上でその男を殺すなど言っている」

「だから、何故だと聞いているのです！」

「その男が知っている奴隷市場の流通網だ。売られた子供の行く先や未だ何処かに商品として保管されている人々の居場所をそいつは知っている！ ……それにイリヤ。戦う力も無い者に、刃を振り下ろすのが君の騎士道なのか？」

「それは……」

「これは俺の勝手な望みだ。けれど君には、君自身が常に誇れる君

であって欲しい」

一瞬、イリヤは息を呑む。

瞳を見開き、瞳を閉じ、瞳を伏せ、そしてまた瞳を開く。

その瞳には葛藤が見えた。

彼女が歯を噛み砕かんばかりに噛み締める音が、エクレールの耳には届いた気がした。

「その言い方は、あまりに卑怯ではありませんか……」

「たとえ俺が卑怯者になろうとも、君には気高くあって欲しい」

「やはり卑怯者です、あなたは……」

そう言つてゆつくりと下ろされた剣に、エクレールはホッと安堵の息を漏らしていた。

「さて……。終わりだよ、オーガスト・サラザール。」

つかつかと靴音を鳴らし、エクレールは石畳を歩く。

がつくりと項垂^{うなだ}れている巨漢の男は、肩をビクリと震わせていた。

「なあ、頼む！ 私を此処から逃がしてくれ！ 上手く逃げられたら望みの報酬をやる！ 頼む、金ならいくらでも——」

だが不意に面を上げると、サラザールは必死の形相で訴え始めた。立ち上がり、彼は懇願するように言う。

しかし言葉は、それ以上は続かなかった。

「黙れ……」

酷く底冷えする声。

それと同時に風を切り裂く拳。
放たれた言葉と拳は、二人が一斉に出したものだっ

た。悲鳴を上げることもなく、サラザールは地面を転がる。
死んでこそいないが、数日は顔の腫れが引かないだろう。

沈黙した男を尻目に、二人の男女は互いに顔を見合わせていた。

互いに不敵に笑う。

青年と少女は楽しげに言う。

「ようやく気分がすっきりしたよ」
「偶然ですね。私もです」

第六節

国境と花園の町、フィオーレ。

人口、約一万。

色とりどりの季節の花々が名物で、季節ごとに様々な色合いに街が染め上げられる。

街中では年中花見の席が設けられている賑やかな町だ。

しかし、この町の名前を知っている者はそう多くはない。

大抵がギルド関係者。

それ以外となると、このご時勢に国境越えまでして商売をしているバイタリテイ溢れる商人か、都市部に顔を出せない日陰者のどちらか。

ともあれ、そんな町にも教会はある。

町の規模から考えれば些か質素ではあったが、何処の教会もステンドグラスというものは見ていて美しい。

そんな感想を、イリヤは思考の隅で考えていた。

教会の中に、あまり人はいなかった。

この町はオルティシアの管轄ではあったが、土地柄上、仕方の無い事。

そんな事など、ついさっきまでの自分なら考えもしなかった。

イリヤはそんな自分自身に驚かされていた。

「……………」

教会の祭壇に飾られた御神体を見つめ、彼女は目を瞑る。
胸に手を当て、頭^{こぶし}を垂れる。

つい先ほどまでは、こんな気持ちにはなっていなかった。

悩みが無い、などという気はなかったが、それでもこつも心を掻き乱すような物など無かった。

小さなさくれが、じくじくと痛む。

けれど幾ら祈ろうとも、幾ら神に問いかけようとも――。

「答えを示してはくれないのですね、主よ……」

悶々とした気持ちを抱えたまま、彼女に出来ることは今朝の出来事を振り返ることだけだった。

「えー、というわけで、こちらが今回のお二方への報酬となります」

サラザールの屋敷での騒動の翌日の事。

ギルドの面会室で数分待たされた後、中へと入ってきた愛嬌のある顔立ちをした女性は、前置きも無くそう話を切り出していた。

エクレールとイリヤ。

二人が腰掛けた机には、金貨がおよそ三十枚。

三月は楽に遊んで行ける額だった。
それを見て、イリヤは戸惑ったように口を開く。

「あの、これは？」

「お二方への報酬ですよ？」

「いえ、ですから何に対する報酬なのかと……」

「えー、奴隷商人オーガスト・サラザールの逮捕に対するご協力と、
屋敷内にいたトロールを討伐したことに対する報酬が一応メインと
なっておりますね」

つらつらと澀みなく書状を読み上げ、メアリー・スチュアートは
につこりと笑顔を向けてくる。

若干幼く見える、見る者の毒気を抜く笑顔だ。

しかし、この一見すると何も考えてなさそうな少女のような女性こそが、
このフィオーレのギルドで支部長を務めているというのだから驚きであった。

人は見た目によらないという言葉を、イリヤは身をもって実感していた。

「ですが……」

「何かご不満でも？」

「多すぎる。そう言いたいんだろ、イリヤ？」

「はい……」

訝しむイリヤの心中を、エクレールは言い当てる。
事実、この報酬は破格といえた。

相場を考えれば、半分でも多いぐらいだろう。

エクレールは、ふっと口元に笑みを零す。

「まあ、口止め料も含まれているんだろうね……」

「人聞きが悪いですよ……。迷惑料とお呼びください!」

エクレールとメアリーは互いに笑顔だが、その心までは判らない。むしろ互いに、相手に考えを読ませないように仮面をつけているというべきだった。

そんな二人の異様な会話に、イリヤは一人付いて行けずにいた。

「……どういうことですか?」

「ギルド側は今回の一軒を表沙汰にする気はない、って事だよ。ギルド所属の商人が裏で奴隷商人として暗躍していたなんて、ギルド全体の信用問題に関わるからね。表沙汰にできるわけがない」

「まさか、揉み消すつもりですか……?」

イリヤの全身の血液が沸騰する。

眼光鋭くメアリーを射抜き、その剣幕は下手をすればいつ剣を抜いても可笑しくはなかった。

しかし。

「落ち着いてくださいよ、アイゼンバーグさん」

見る者を威圧する覇気に満ちた形相だったが、メアリーは変わらぬ態度で話を進める。

「もちろん、サラザールには適当な罰を与えます。彼が人間らしい生活をする事は今後一切ありません」

機械的に、ただ淡々と。

メアリーは愛くるしい笑顔でさらりと恐ろしいことを告げる。

その静かな凄みに、イリヤのほうに息を呑んでいた。

黙り込んだイリヤに代わり、エクレールが尋ねる。

「ゴールドバーグはなんて？」

「マスター・ゴールドバーグ直々のお達しですよ」

「なら大丈夫か……」

そう一言だけ呟くとエクレールは唇に手を当ててなにやら思索する。

しかしその思考が一つの形になるより先に、不意に隣で人が立ち上がる気配を彼は感じた。

「すみませんが、失礼させていただきます……」

イリヤだった。

その表情には露骨に不快の色が窺えた。

「ありや？ 報酬を持っていかないのですか？」

「依頼を受けた訳ではありませんから……。それに、それを受け取るのは私の矜持に反してしまいそうなので」

そう短く返すと、彼女は振り返ることもせず部屋を後にした。

残されたエクレールとメアリーは顔を見合わせる。

「ずいぶんとまっすぐなお人ですね。清々しいくらい」

「大人は汚いものだからね。先立つものもあるだろうし、素直に受け取っておけばいいものを……。けど彼女のように清廉潔白な人間を見ていると、少しうらやましいよ」

「失礼な！ 私は汚くないですよ。今日だってちゃんと朝風呂に入ってるんですから」

「判ってて言ってるよね、君」

呆れたようにため息一つ。

用意されていたお茶を一息に啣り飲むと、エクレールも席を立つ。

すると、メアリーは思い出したように慌てて口を開いていた。

「あ、エクレールさん。ジュデイスさんから伝言です」

「ん？」

「明日会いたかったので、ギルドのバーで待つていて欲しいと。今朝方、伝書鳩が到着してましたので」

「……ジュデイスはセルシウスの大支部長だろくに。なんでオルテイシア領内にまで出張ってきてるんだ？」

「今回の一件で、慌てて飛んできたそうですよ。もちろん、あなた絡みで」

「彼女らしいか……。っと、すまないけどそろそろ」

「はいはい、ですよ。あ、それと……アイゼンバーグさんの事、よろしくおねがいします」

最後の最後にメアリーが見せた沈痛な面持ちに、エクレールは本心からの優しい笑みを零す。

深々と頭を下げる彼女を背に、彼は今度こそ部屋を後にした。

ぱたん、と軽い音を立てて扉が閉まる。

その音が聞こえて漸く、メアリーは面を上げていた。

「はあ、やっぱりいつも嫌な役ですね、こうゆうのは……」

部屋の扉が閉まり終えるまで見送った後、メアリーは面会室の椅子に腰掛ける。

深いため息を零し、天井を見上げ、彼女はついさっきここで怒りを見せていた少女に思いを馳せる。

まさかあの大金を前にしてああも潔く受け取りを拒否されるとは思ってもいなかった。

良い目だった。

願わくば、あの曇りのない瞳で様々なものを目にして欲しいとメアリーは願う。

「しかし、まあ……」

目の前の机の上に置かれた置き去りのまま金貨の山に、彼女は思う。

男のほうも、十二分にまっすぐだと。

この大陸には主に五つの勢力がある。

まず人間族の国・オルティシア。

もともとは大陸北方に位置する小さな国だったが、先代皇帝の代に周辺諸国を併呑して行き、一躍巨大国家として台頭した国だ。

次に大陸東方のナ・トゥール。

獣と人の姿を併せ持った人々が住まう国で、高い技術力と身体能力

を併せ持っている。

更に大陸南方には妖精族が統治するセレスハイム。
人間族やナ・トゥールの民が信奉する古き神々だった種族が治める
幻想の国。

そして大陸西方には魔族と呼ばれる者たちが治めるセルシウスと
いう国が存在する。

それら四つの国家にギルドを合わせたものを、一般的に五大勢力
と人々は呼んでいた。

ギルドは特殊な存在だった。

国土を持たない第五の国家。

元々はゴールドバークという人物が築き上げた商店『黄金の園』ゴールドバークを
土台に、様々な分野の商店が吸収されて出来た財閥のようなものだ
った。

だが、あるときを境にその様相が変わってくる。

その中にはモンスター退治や傭兵といった荒事も含まれてゆき、そ
の勢力網は各国の市井の生活に根を張っていったのだ。

街道を移動する際にはギルドで護衛を頼むし、地方にモンスターが
現れればギルドに退治を依頼する。

行政が対応しきれない手の届かないところに素早く対応する。

そうすることで、次第にギルドは人々の生活に欠かせない物となっ
ていった。

だが何よりも恐ろしいところは、その商業面での力である。

ギルドに手を出せば物流が止まると言われている程だ。

屈強なギルドメンバーを抱えていることもあり、国家もおいそれと

は手を出せない。

故に、五大勢力の一つと呼ばれている。

「と、いうわけだけど――」

「流石にそれぐらいは知っています……」

テーブルを挟んで向かいに腰掛けたまま懇切丁寧に説明され、イリヤは辟易したような態度を見せる。

どうやらエクレール先生の社会学講座は、彼女には不評だったようである。

「つまりそのギルドの信頼が揺らぐと、国民の生活に多大な影響が出ると言いたいのでしょう？ 私にもそれぐらいの頭はあります」

「けど、心が納得しない、か……」

「……………」

「そろそろ機嫌を直したらどうだい？」

「ですが……。自分の行いに意味が無いように感じられて……」

そう言ってイリヤは溜息を吐く。

フィオーレのギルド本部にあるラウンジで食事を取っていた二人だったが、場の雰囲気は最悪であった。

周囲には他にも食事を取っている人間がいたが、皆一様にイリヤの不機嫌オーラに当てられて少し距離を離している。

エクレールとしても、居心地が悪い事この上なかった。

仕方なく、エクレールは話題を変えることにする。

「ところでイリヤ。君はこれからどうするんだい？」

「なんですか、藪から棒に」

「いや、少し気になってね。こんなご時勢に女性が一人旅をする理由……。しかも君は確か、オルティシアの騎士士官学校の主席卒業生だったはずだ。将来は約束されているだろうに、またどうして……？」

「それは……」

エクレールの質問に、イリヤは目を伏せる。

答えたくない、というよりは、どう言葉にしているのか戸惑っているという感じだった。

やがて彼女はゆっくりと面を上げる。

そしてゆっくりと語りだした。

一言一言、言葉を選ぶように。

「確かに私には騎士団に入る道もありました。けど、それ以上に大切なことが出来たのです。……私は、セルシウスに行きたい」

「セルシウスに？ それはまた……」

エクレールは意外そうに言う。

唇に手を当て、いつもの考える仕草をしていた。

大陸西方に位置する魔族の国、セルシウス。

そこに行きたいと言うオルティシア人など、まずいない。

オルティシア人にとって魔族とは忌み嫌うものだ。

この世界、特にオルティシアの人々の間で根強く信じられている『ファンタスマゴリア 創世神話』で、魔族は端的に言えば悪性の存在として語られている。

人心を惑わし、墮落させ、世界を破滅へと導く存在。

そんなものの巣窟となっているセルシウスに行きたいと思う人間な

ど普通はいない。

その理由がわからなくて、エクレールは問う。

「理由を聞いてもいいかい？」

「それは……」

「話せない？」

「すみません、あなたを信用していない訳ではないのですが……。私自身も少し馬鹿げていると感じているような理由なので……」

「そうか」

言い淀むイリヤに、エクレールはこれ以上深く追求することをやめた。

共闘したとはいえ、出会って間もない。

仮に数十年来の知り合いであっても、人には話したくないことなど存在する。

それを根掘り葉掘り聞き出すような趣味など彼にはなかった。

それどころか、申し訳なさそうにしているイリヤにエクレールは頭を抱えてしまう。

場の空気を換えようとした結果、更に空気が悪くなっていた。彼としてもお手上げだった。

すると、不意に横合いから元気な声が聞こえてきた。

「せんせーい！」

その声にイリヤとエクレールは同時に顔を向けていた。見えたのは、エクレールに馴染みのある顔だった。

「パティ！」

サラサラとした栗色の髪を揺らし、満面の笑顔を浮かべて飛び込んできた少女をエクレールは受け止める。

エクレールが頭を撫でてやると嬉しそうに目を細める少女に、イリヤは不思議そうな表情を浮かべていた。

「あの、この子は？」

「ああ、すまない。サラザールに誘拐されていた俺の教え子だよ。ほらパティ、挨拶して」

「パトリシア・ハーヴェイです。こんにちは！」

「イ、イリヤ・シュヴァルツ・アイゼンバーグです……」

元気良く挨拶され、イリヤは僅かに面食らう。

しかし挨拶して返したものの、パトリシアは何故か難しい顔をしていた。

「イリヤシュヴァル……？」

「くすくす……イリヤでいいですよ、パトリシア」

長い名前が覚えられなかったのか、一生懸命に思い出そうとしている仕草が酷く愛らしい。

パトリシアを見て、思わずイリヤは笑みを零していた。

「じゃあ私もパティでいいよ、イリヤお姉ちゃん？」

「ええ、よろしく。パティ」

そう言って、エクレールがしたのと同じように頭を撫でる。するとパトリシアは照れくさそうに笑う。

そんな二人の姿を見ていたエクレールは一言。

「意味ならあつた」

「エクレール？」

「この笑顔を取り戻せた。君の行動の意味なら、それで充分すぎる」
「あ……」

間抜けに口を開いたまま、イリヤは言葉にならない声を漏らしていた。

けれど次の瞬間には、唇を一文字に結び、彼女は誇らしげな笑みを浮かべていた。

「ええ、そのとおりですね」

第七節

楽しい談笑はあつという間だった。

パトリシアを含めた食事は終始笑顔で終わり、イリヤはパトリシアを見送った後もニコニコと上機嫌だった。

対面に腰掛ける彼女のそんな様子に、エクレールも自然と優しくな色を瞳に湛えていた。

パトリシアは先にギルドの手配によって家へと帰ることとなった。パトリシアだけではない。

サラザールの屋敷に奴隷として捕らわれていた多くの人々も、故郷あるものは故郷へと送り届けられることとなっていた。

メアリーの話では、故郷が既に無い者もギルドのほうで今後の生活の見通しが立つまで様々な支援をするとのことらしい。

ともあれ、今回の一軒はこれにて一件落着であった。

「さて、それじゃあ今後の事について話し合おうか」

「……まるで一緒に付いて来るとでも言わんばかりの口ぶりですね」

「まあ、そのつもりだけどね」

「そのつもりって……」

さらりと何でも無い事のように言うエクレールに、イリヤは頭痛がするかのように頭を押さえて溜息を零す。

「私が行くのはセルシウスですよ？」

「ならどの道行き先は一緒なんだから良いじゃないか」

「どの道一緒って……。あなたは教師でしょう。冒険者でもあるまいし、セルシウスに何の用が……」

「だから、僕はセルシウスで教鞭を取ってるんだけど」
「はい？」

鳩が豆鉄砲でも食ったかのような表情のイリヤに、エクレールは少しだけ噴出す。

だがイリヤは笑われていることにも気づかない。
それだけ思考が停止していた。

オルティシアに住む人間にとって、セルシウスとは文字通り魔窟だ。

イリヤが伝え聞いているセルシウス人の容姿も、身の丈八尺以上。いわく、全身に鱗を生やしていたり、いわく、牙を剥き出しにしていたりと、とかく凶暴で醜悪なものだった。

さすがにそれをそのまま鵜呑みにするほどイリヤは馬鹿正直ではなかったが、オルティシアで一般的に語られている魔族の風貌とはモンスターのそれだ。

そんな環境に住んでいると言う目の前の男は、イリヤの想像の遥か斜め上に行くものがあった。

「エクレール……。あなたは魔族なのですか？」

「いいや、人間だ。けど、魔族なら君はもう会っているよ」

「パティ……ですか」

パトリシア・ハーヴェイ。

笑顔が似合う、栗色の髪の少女。

まだ出会って間もないが、少し触れ合っただけのイリヤにも十分すぎるほど判っていた。

間違いなく、あの子はいい子だ。

とても素直で、とても……。

「とても信じられないかい？ まあ、昨今語られているセルシウスの情勢は聞くに耐えたものじゃない。獣呼けだものばわりされているナ・トウールも大概だが、それ以上の汚名を着せられているのが現状だよ」

エクレールは言う。

大陸に存在する勢力は皆、互いに国交が盛んではない。

市井も政府も、お互いがお互いに干渉をしない。

街を一步出れば、そこはモンスターが跋扈する世界。

好き好んで行き来するものなど居ない。

それが国境くにぎかいともなれば尚更だ。

国家による統治、統制が行き届いていない辺境は、より一層の危険地帯。

経済ならば自国内だけで上手く回る。

わざわざ危険を冒してまで、余所へと赴く意味などない。

故に、他国の情報が姿勢の人々にまで届くことはない。

故に、人々は他国へまで足を運ばない。

故に、人々は勝手に想像を巡らせる。

そして悪いことに、そこにもう一つの要素が加わっていた。

「イリヤは『ファンタスマゴリア創世神話』を信じているかい？」

『ファンタスマゴリア』

「『創世神話』ですか？ いいえ、私はあまり……。物語としては嫌いではありませんが……。最近は宗教色が強すぎて……」

「あれ？ イリヤって神様とか信じてないクチ？」

「信じてないわけではありません。礼拝に教会を訪れたことなど何度もありますし、世界の礎を築いた偉大なる父神を崇拝してもいます。ですが、最近の『ファンタスマゴリア創世神話』は……」

そう言葉を濁し、イリヤは露骨に嫌悪の表情を見せる。

『ファンタスマゴリア』

『創世神話』

偉大なる父神が世界の礎を創造し、その子たる神の子が地上に降り立ち人を造った。

神の子によって人々は導かれたが、その繁栄を妬む一族・魔族が現れ、人々に刃を向けてきた。

だが神の子は一人の若者とともに魔王を倒し、ついに世界は光に満ちたる純白の世へと移り行く。

それが、イリヤが幼少のみぎりより語り聞かされてきた『ファンタスマゴリア創世神話』だった。

だが、今の『ファンタスマゴリア創世神話』は違う。

最近ではオルティシア人を神の子の末裔だと称する一派が現れ始め、古来より魔族と称されてきたセルシウスの人々に対する偏見や差別はエスカレートしている。

一種の選民思考に近い様相を呈しているのが、今の『ファンタスマゴリア創世神話』だった。

「まあ、ともかくだ。そういうわけで俺はセルシウスへと帰る。帰

り道が一緒なら、一緒に行かないか？」

そう言って男が見せた表情は、なんとも言えない苦笑を湛えていた。

「ふう……」

教会にて一人、イリヤは今朝の出来事に溜息を零していた。

自らの内に芽生えた拭いきれない違和感の萌芽。

それはひよつとすると図に当たっていたのかもしれない。

昔から勘が鋭いと言われていた彼女だったが、今回ばかりは自らの勘の良さを恨みたかった。

セルシウスに向かうのには、彼女なりの理由がある。

それはおよそ他人に話す事など出来ない内容で、彼女が幼き頃から抱き続けていた悲願……。

なのに、此処にきて迷いが生じてしまっていた。

セルシウスの魔族は、殆どモンスターに近いような容貌としてオルティシアでは伝えられている。

だが実際には違った。

エクレールやパティ。

あのような人々が身を置くセルシウスという国。
今そこで自分がやろうとしている事は、果たして正しい事と言える
のだろうか……。

いくら考えても、答えなど出ない。

だから彼女にしては珍しく神に答えを求めてみたのだが、やはり答えなど教えてくれる筈もない。

「はあ……」

「何かお悩みですか、美しいお嬢さ——」

「——ッ！」

「うおおおおっ！！？」

後ろから突如かけられた声に、イリヤは腰に下げた剣を引き抜き全力で横薙ぎに払っていた。
対するエクレールは突如として首を狙い打ってきた白刃に、素っ頓狂な声を上げながら辛うじて身を振る事に成功していた。

九死に一生を得た男は、荒い息を吐きながら言う。

「ごめん、俺そんなに嫌われていたなんて……」

「あ、違います！ その、急に声を掛けられて驚いて、その……。子供の頃に誘拐されたことがあって、背後からいきなり声を掛けられるとつい……」

「事情が事情だからあれだけど……。その癖直さないと、いつか死人が出るよ？」

「も、申し訳ありません……」

割と本気で気にしているらしく、イリヤはエクレールが見たことが無いほどに気落ちしてみせる。

が、ふとエクレールが此処に来ている事に今更ながら彼女は気付く。

「あの、エクレール？　ここは教会ですよ？」

「まあ、魔族だからって入っちゃ駄目って事は無いし、そもそも俺は人間だし」

イリヤの疑問など意にも介さず、エクレールはイリヤが今まで腰掛けていた隣に腰掛ける。

座れ、という事なのだろう。

言外にそんな意思を感じ取り、イリヤは戸惑いを見せつつも再び椅子に腰掛けていた。

「とりあえず、前に進んでみたらどうだい？」

エクレールは、不意にそう話を切り出した。

「悩みを抱えたまま、ですか？」

「そう。君はまだ若いんだ。時間はある。とりあえず前へと進み、己が双眸そうぼうにて多くのものを見てみるといい。結論を出すのは、それからでも遅くは無い」

「私が何を成そうとしているかも知らないくせに、他人事だからと随分勝手に言ってくれるのですね」

「そりやそうだよ、他人事だもの。だからさ――――」

エクレールは言う。

「結局、最後は君自身が結論を出すしかない。君自身の意思で、君自身の歩むべき道を、君自身の足で進むしかない。俺が出来るのはあくまで提案だけだ」

「それが間違った道だったならば？」

「それは君自身の責任だ」

「随分と、手厳しいんですね……」

「それが大人だよ」

エクレールは立ち上がると、襟を正してイリヤに向き合う。

普段の飄々とした態度からは想像もつかない、真摯な瞳。

イリヤは一瞬、吸い込まれそうになっている自分がいることに気付く。

エクレールは言う。

「けれど道を違えたとき、君さえよければ俺は君を引き戻そう。一人では惑う旅路でも、二人ならば光明が見えることもある」

そう言って、彼の右手は差し出されていた。

不思議だった。

普通なら、見ず知らずとはいかなくとも、出会って間もない相手にこんな事を言ってくる相手を、イリヤは信用しない。

サラザールの事も有った所為で、むしろ以前より猜疑心は強くなっている。

なのに、なぜだろうか。

イリヤは、差し出されたその手を自然と取っていた。

「それじゃあ、とりあえずセルシウスまで宜しく頼むよ」

にこやかな笑みを向けてくる男。
イリヤはその手に引き上げられていた。

二人はそのまま教会を後にしようとする。
出口に差し掛かったとき、不意にイリヤは言う。

「なぜ、あなたはこうも親切にしてくれるのですか？」
「悲しいことが嫌いだから」
「ですが……」

それだけではない気がした。
なんとなく勘ではあったが、イリヤはエクレールが嘘を吐いている
という確信があった。

信用して良い人間ではあるだろう。
サラザールの屋敷での一件にしろ、今回の一件にしろ、彼が悪人
ということは考えにくい。

まじまじと訝しげな視線をイリヤが送っていると、エクレールは
やれやれと溜息を零す。

「だってイリヤ、お金持っていないでしょ？」
「……はい？」

不意にエクレールが発した言葉があまりに予想外すぎて、イリヤ
は呆気にとられた表情を見せる。
そんな彼女の様子を気にも留めず、エクレールは淡々と言葉を続け
ていた。

「サラザールに所持品は奪われていてお金は無し。宿に止まるにも食事をするにも必要だろうに、君明日からどう生活するつもりだったの？」

「あ……」

「やっぱり考えてなかったか……。奴隷に身を落とした人々を救った勇者様が明日から路上生活の物乞いに身を落とすかと思うと、先生悲しくて涙が零れそうだよ」

「うぐっ……」

エクレールの言うとおりだった。

今朝までは寢床も食事もギルドの世話になっていたが、これからはそうも行くまい。

かと言って、イリヤには先立つものも無い。

もともと路銀を稼ぐためにサラザールの依頼を受けたのだ。

仮に奪われたお金が戻ってきたとしても、一日も持つかどうか……。

「……さっきのギルドでの報酬、受け取っておくべきだったでしょうか？」

「少なくとも、今更受け取りにいくほど格好つかないことも無いだろうねえ……」

普段から自信に満ちた彼女にしては珍しく、おずおずとエクレールに問うイリヤ。

そんな彼女に、エクレールは呆れたように苦笑を漏らすだけだった。

第七節（後書き）

ひとまず第一章はこれで終わりです。

イリヤとエクレールの出会いの物語でしたが、いかがだったでしょうか？

伏せている内容なども多いので現状では意味が分からないかもしれませんが、そこは追々ということでは……。

そして作者の予想以上に読んでくださる方が多く、ただただ感謝を引き続きお楽しみいただければ幸いです。

もし何かご意見ご感想があれば、遠慮なくどうぞ。

今後の作品作りの参考にさせていただきたいと思います。

次回は少々時間が掛かると思いますが、どうかご容赦を。
では、また次回。

第一節

時計の針が示す時刻は午前八時。

花の町・フィオーレには、今日も優しい朝の日差しが降り注いでいる。

その日差しを受けながら、男は呟く。

「眠い……」

朝が苦手だった。

大抵の事は人並み以上にこなせる彼だったが、幼い頃からどうにも朝早くに起きることだけは慣れることは無かった。

欠伸を噛み殺しながら、彼は頼んでいたコーヒーを^{すす}啜る。

コーヒー特有の豊かな香りも、効果はいまいちだった。

男が今いるのは、ギルド・フィオーレ支部内にある食堂だった。時間も時間なだけに、朝食にと集まってきている人で結構賑わっている。

ギルド支部というのは簡単に言えばギルドメンバーの為の複合施設のようなもので、ギルド内で斡旋されている依頼を紹介する受付もあれば、宿泊施設やお食事処まで存在する。

元々はギルドメンバーの中にはあちらこちらの支部を巡る者もいるからこその配慮なのだろうが、やはり国境を越えてまで依頼を受ける者は少ないのだろう。

普通に家族連れなどの姿も見受けられ、メニューにお子様ランチなんてものまで載っている辺り、流石は商業から発展したギルドらしいと彼は思う。

もはやメインターゲットは完全に冒険者以外である。

眠気に支配されそうな脳を必死で回転させながら、男は食堂内の人々を観察しつつそんな感想を抱いていた。

というか、そうでもしなければ麗らかな日差しに負けてしまいそうだった。

彼が待ち合わせ場所を訪れると、真っ先に店員から案内されたのは温かな日差しの差し込む窓際のテーブル席だった。
ぽかぽかと心地の良い陽気に、男は眼鏡の下まぶたの瞼を眠そうにこす擦る。

「まったく……。アイツは俺が朝が苦手なのを知っていてなんでこんな時間に、しかもこんな場所で待ち合わせをするのかね……」
「それは勿論、眠そうにしている可愛いレオンを愛でる為に決まってるじゃないの！」

突如横合いから掛けられた快活な声。

男が振り返ると、そこには腰まで届く艶やかな茶色の髪を一房に結い上げた女性がいた。

褐色を基調としたコートを羽織った女性は、悪戯っぽい笑みを浮かべていた。

そんな彼女の表情を見て、男は心底疲れたようなため息を零す。

「ジュデイス……。眼鏡を掛けているときの俺はエクレール。セルシウスで教師を務めているエクレールだ……」

「別にいいじゃないの。どうせレオンの名前を聞いてあのセルシウスの魔王様だなんて気付く人はいないって」

レオンの苦言を気にも留めず、セルシウスのギルド大支部長はあ

つけらかんと言つてのける。
いよいよ以つて頭痛に苛まれるレオンだった。

彼にとって、それは秘匿とすべき事だ。
国外に一国の主が単身出かけるなど、普通ありえない。
どんな危険があるか判らないのだから。

一応、彼なりの変装として魔術的に相手からの認識を阻害して別人に見せかける眼鏡とかを掛けてはいるが、それをこうして簡単にバラされては意味がない。

しかし、ジュデイスはそれも判つてて言っているのだろう。
実際、魔族の外見が化け物として伝わっているようなご時勢だ。
レオンを見て、その正体を悟るものなどいる筈もない。

それぐらいの考えはあるのだろうと、レオンは納得することにした。

もともと彼女との長い付き合い上、ごちゃごちゃ言うことなど無駄なことだと理解しているが故に。

「はあ……。もういいよ、わかつた降参だ。ともかく座りなよジュデイス」

「あつはつは、素直でよろしい！」

そう言うつと、ジュデイスはレオンの向かいではなく隣に腰掛けていた。

窓際のテーブル席で、わざわざ隣にである。

そのことにレオンは何も言わず諦めたような視線をジュデイスへと送っていた。

すると、ジュデイスは言う。

「だって前に座ったらレオンといちゃつけないじゃん？」
「うん、訊いてないからね」

ぎゅっと抱きついてくるジュデイスの胸に、レオンの腕が沈む。
だがレオンは然^さして気にもしていない風に彼女の頭を押しのけていた。

「あーん、レオンのいけず！」

「それで、わざわざこんな朝から俺を呼び出した理由は？」

「うわ、無視された？」

「どうせ毎度の事ながら大した用じゃないんだろうけどさ。今日はなに？」

「うわ、本当にひどい！？　なんでよう。レオンに会いたいつてのは重要なことじゃん！」

「うわ、本当にひどい……」

眠気を我慢して来てみれば、『会いたいただけ』という理由にレオンは溜息を零す。

しかし、そんな彼の態度を見てジュデイスは言う。

「でも、そう言いながらも毎度キッチンと来てくれる辺り、レオンのそういうところ私は好きだよ」

「……ありがとう」

コーヒーを呷り飲みながら、ふいつとレオンは顔を背ける。

ジュデイスは彼のことを優しく笑みで見つめていたが、ふと声の調子を変えて言う。

「まあ、それも本当ではあるけど、理由はちゃんと他にもあるよ。」

ほら」

「ん？」

差し出されたのは、一通の手紙だった。

差出人の欄には、こう署名されている。

ヒルダ・ローレンス、と。

「見たくないんだけど……」

「愛する女性からの恋文じゃん。呼んであげなよ」

「いや、間違いなく読んだら帰りたくなる……」

頭を抱えるような仕種で、レオンは言う。

ヒルダ・ローレンスはとても優秀な彼の部下だ。

そして彼の性格上、非常に気苦労を掛けることが多い。

そして同時に、堪忍袋の緒が切れた彼女にキツイ灸を据えられた事など一度や二度ではない。

今回の手紙の中身に関しても、帰ってからのことが書かれているのだろう。

自業自得と言ってしまうえばそれまでだったが、今回のことは事情が事情だけに少しは容赦してほしいと願うレオンだった。

「なにビビッてんだか。ぎゅっと抱きしめて耳元で愛の言葉でも囁いてあげればイチコロじゃんよ」

「それは男として最低すぎるだろ……」

「あー、確かに……。なら、さっさと帰ったほうがいいよ？ 子供たちはもう助けたんでしょ？」

「まあ、そうなんだけど。けど、そうも行かなくなったんだよ」

「……どうゆうこと？」

レオンは目を伏せる。

何かを思案するようにその視線を杯へと向け、おもむろに彼はそれを呷り飲む。

口を開いて彼は言う。

「連れが出来ちゃったんだよ」

「また女の子？」

「またって……」

「言われてもしようがないでしょうに。それともまさかの男に走って」

「ない。イリヤ・シュヴァルツ・アイゼンバーグって名前のエストレーラ帝立騎士士官養成学校の主席卒業生。理由あってセルシウスを目指しているらしい」

「へえ、それはまた……」

レオンの言葉に、此処に来て初めてジュデイスの顔に驚きの色が浮かぶ。

だが、それも僅か一瞬。

回りの人間が気づかない程の一瞬の後、彼女はまた普段の明るい口調で話を始めていた。

「けど、それがなんで帰れない理由なのよ？」

「お金が無いんだよ。彼女、ちょっと事情があって無一文でね。けどだからといって、俺もセルシウスまでの二人分の旅費なんて持ち合わせて無くてさ。ちよつと金策しなきゃいけないんだ」

「本当にそれだけ？」

「……まあ、放っておくには少し心配な子でもあるんだけどね」

「ふうん……。あ、そうだ。お金に困ってるんなら、お金貸そうか

？」

「後が怖いから遠慮しとく」

「うわ、ひどっ!？」

そう言つてジュデイスはからからと笑声をあげる。

しかし言葉とは裏腹に笑顔のジュデイスだったが、内心ではほんのりシヨックを受けていたりもする。

レオンと彼女との間で繰り広げられた語るも涙、聞くも涙な壮絶な漫才の歴史を鑑みれば自業自得なのだが、彼女がそれに気づくことは無いのだろっ。

レオンとしても、それを理解しているが故に少し頭を抱えている問題だったりする。

女性を悲しませるなど、彼の本望ではない故。

しかし、そんな彼の考えを凜然とした声が遮った。

「エクレール！」

後ろから掛かる声にレオンが振り返ると、そこにあつたのはイリヤの姿だった。

朝も早いというのにその眼差しはしっかりとしており、常日頃の彼女らしい凜とした空気を纏っていた。

どうやら朝には強いようだ、とレオンは思った。

「おはよう、イリヤ。体の調子は？」

「ええ、おかげさまですっかり……。どうやらあの魔法薬、しっかりと効いてくれたようです。まさか二日で骨の輝ひびが治るとは、正直今でも信じられないぐらいですが……」

「うーん…… 本当なら即効で治るはずなんだけど…… まあ、ともかく良かったよ」

「はい。……あの、ところでそちらは？」

「ああ、彼女は――」

「エクレールの妻三号です！」

「ぶはッ!？」

「……は？」

ジュデイスの突然の発言にレオンは盛大に噴出す。

イリヤの前でエクレールと呼んでくれた辺りは流石に気が回ると純粹に賞賛したかった彼だが、問題は後半だった。

妻、しかも三号。

その言葉の意味は普通に考えれば最低男である。

戦々恐々とするレオン。

だがイリヤはきょとんとした表情を浮かべていた。

この隙に、レオンは空気の改善を試みる。

だが――、

「すまない、イリヤ。こいつ昔から冗談が服着て歩いてるような奴なんだ」

「ちよつと、まで。私のレオンに対する愛は冗談なんかじゃ――」

――

レオンとジュデイスの目が合った。

その瞬間、二人は目だけで会話していた。

「（頼むジュデイス少しは空気を読んでくれ……）」

「（セルシウスに戻ったら一日デート……）」

「（約束する……）」

「（欲しかった服があるんだけど……）」
「（買ってあげる……）」
「（いっぱい可愛がってくれる？）」
「（喜んで……）」
「（ジュデイスちゃんは……）」
「（可愛い……）」
「（交渉成立だね）」

ジュデイスは悪戯っぽい笑みでウィンクして見せた。
それと同時に、状況を飲み込めていないイリヤが漸く口を開く。

「あの……？」
「あー、ごめんごめん。こういうノリは嫌いな方だった？」
「はい？」
「まあ、立ち話もなんだから座つてよ。エクレールからは話は聞
いてるよ。イリヤちゃん、だっけ？」
「え、あ、はい……」

かなり強引な方法ではあったが、有無を言わさない口調でジュ
デイスは話を有耶無耶にする。
言われた通りに椅子に腰掛けるイリヤに対し、ジュデイスは矢継ぎ
早に話を切り出していた。

「私の名前はジュデイス・G・バードッグ。ギルドのセルシウス方
面大支部長をさせてもらつてる人間よ」
「セルシウスの大支部長？ あ、なぜそんなギルドの大幹部が此
処に？ それにフィオーレはオルティシア領の筈ですが……」
「それは内緒で。まあ、そんなことより……」

そこで、ジュデイスは表情をやや改める。

「イリヤちゃんって、いまお金に困ってるのよね？」
「うっ……」

その言葉が、イリヤの触れては欲しくない部分を直撃した。
羞恥からか頬を僅かに染めつつ俯くその様は、戦場においての勇猛さが嘘みたいになんないものだ。

テーブルの上へとイリヤは視線を落とす。
だが、その視界にすっと一枚の紙切れが差し出された。

そこにはこう書かれていた。
危険度Sの緊急依頼、と。

「内容はセルシウスとオルティシアの国境沿いに位置するユクトの森で、最近ユクトレックスっていう竜種のモンスターが暴れてるらしいから、その原因究明と事態の解決。報酬はイリヤちゃんとレオンがセルシウスに向かうための旅費を前払い、残りはセルシウスに着いてから支払うつてことで。位置的にもセルシウス方面なわけだし、二人にとつては――」
「ジュデイス……」

会話の最中に男のため息が零れる。

危険度S。

こうして字面にとまるでファンタジーゲームのようで緊迫感に欠けそうだが、事実はその字の通りだ。
一般的には『トロールなどの上位種モンスターの討伐など、国軍の中隊規模の戦力が必要とされる依頼』と定義付けられていて、総じて緊急性を要する場合が多く、ギルド側から有力なメンバーに声を

かけられるため、一般で依頼が出回ることはない。

それを個人、ましてや表面上は何の実績も無いイリヤに回すような依頼ではない。

「いや、本当に人手が不足してるのよ。セルシウス支部には今こんな依頼を受けられるような人材がいなくてさ」

「だったら君が直接やればいいだろ」

「私は一応大支部長だからさ。あんまり下の仕事を奪うわけには行かないの。それに……」

言って、ジュデイスはレオンからイリヤへと視線を移す。

そこにあっただのは、真剣な表情のイリヤの姿。

「イリヤちゃんは、もうヤル気みたいよ？」

「ええ、引き受けさせていたきたい」

「待ってくれ、イリヤ。ジュデイスは軽い感じに言ってるけど、下手すりゃ普通に命に関わるような危険な仕事だ。旅費を稼ぐだけなら他に幾らでも仕事はあるんだし、断つても良いんだぞ？」

「しかしこうして依頼が出ているということは、困っている人々がいるという事です。そしてそれを引き受ける人間がいらないというなら、見過ごしては置けません」

そう言っただけでイリヤは話を終わると、傍を通りかかった店員にメニューの注文をしていた。

その瞳には迷いは無く、彼女にとって決断は既に過去のものでしかなかった。

レオンの脇腹をジュデイスが軽く小突く。

彼女はイリヤには聞こえないぐらいの小さな声で囁く。

「なるほどね、確かにこれは心配になるわ……」

目の前で店員にあれこれと聞いている少女を余所に、ギルドの大支部長は彼女らしい悪戯な笑みを零す。
レオンはただ溜息を零すしかなかった。

第二節

レオンとイリヤが、ジユデイスとギルドの食堂で話をした日の午後。

二人はギルドの位置する行政区画から離れ、買い物客で賑わう商業区へと足を運んでいた。

町中いたるところに咲き乱れる街路樹の花々。

その美しさに目を奪われながらも二人はやがて目的の場所へと辿り着いた。

瞬間、

「これは……」

「へえ……」

二人の口から感嘆の声が漏れる。

フィオーレという町を見てみると、此处が辺境の町だということを忘れそうになる。

このご時勢に旅をする人間というのはそれほど多くは無いが、それでも国内を巡る行商人やギルド関係者は必ずと言って良いほどその口を揃える。

この町を訪れたのは初めてだったが、レオンは『なるほど』と得心が行ったように呟いていた。

住んでいる人口は少ない筈だが、町の中は活力に満ちた声で賑わっている。

中心街には露店が立ち並び、道行く主婦が今晚の食材を買い込んでいた。

その内容から、恐らく今晚はハンバーグだと彼は断じる。子供が喜びそうだ、という感想も抱きつつ。

ともあれ、町は総じて活気に満ちていた。

国境沿いということもあり、他国の珍品を目当てにやってくる商人も多いのだろう。

商人が多いということは、護衛でやってくるギルドの人間も多い。つまりこの町は、町の住人以上に人間が多いのだ。

露店街を訪れたのは今日が初めてだったイリヤは呆然と口を開く。

「凄い……。帝都の商店街に引けを取らない賑わいですね」

「まあ、ギルドの食堂にお子様ランチがあるぐらいだもんね。ほんと、商魂逞しいよ」

「まあねー。ギルドの支部がある町だもの。商業的發展に関しては抜かりは無いわよ」

レオンの言葉に、誇らしげにその豊満な胸を張るジュデイス。

その笑顔には、屈託の無い思いが見て取れる。

ギルドの支部長は町の顔役のような事をしている場合が多く、この商店街もギルドのほうで管理しているのだろう。

ジュデイスはセルシウスの大支部長なので、直接関係しているのはフィオーレ支部長であるメアリー・スチュアートの筈なのだが、彼女はまるで自分のことのように誇らしげにしていた。

その姿を見て、レオンは思った。

「待て。なんで君がいる？」

「え？」

「え？　じゃない。俺とイリヤの旅の準備になんで君まで付いて来てるんだ」

「そりゃ、もちろん財布代わりですよ？」

「今朝食堂で前金として金貨を貰ってるんだけど？」

「あ、あはははは……」

「まったく……。まあ、別に良いけどさ。ほんと、放つといたら依頼にまで付いて来そうで怖いよ」

「え？」

「……え？」

「あ、いや。あははははは……」

「……………」

明らかに挙動不審なジユデイス。

そんな彼女を見て、レオンは確信する。

絶対に付いて来る気だ、と。

原則として、ギルドの依頼にギルドの幹部が同行する事はない。学童保育の引率ではないのだ。当然であろう。

だが例外として、危険度の高い依頼、重要な依頼にはギルド側から監督役が派遣される事もある。

しかしそれにしても、ギルドの大支部長は異例すぎる。

ギルドの長であるギルドマスター・ゴールドバーク。

その下にいるのが各国のギルドを取り仕切っている四人の大支部長だ。

ジユデイスは見た目に権威や威厳を感じさせない若々しいフラン

クな人柄だが、アレでも正真正銘の大幹部。
もし彼女の身に何かあれば大事である。

が――。

「まあ、俺も人のことは言えないか……」

自分自身の行いを鑑みて、彼はそれ以上追求するのをやめる事にした。

一国の主である自分が言っても、説得力は皆無である。

そしてそれ以上に、ジュデイスの身に何か起きる姿など彼には想像も出来なかった。

「あの、保存食は何日分ほど買い込めば良いのでしょうか？」

「そして君は本当にこっちの会話に興味ないのね」

「はい？」

「いや、いいよ。こっちの話だ」

「はあ……って、あれ？ ジュデイスさん、どうして此処に？」

「やほー。ま、細かい事は気にしないで。それとジュデイスで良いよ、イリヤちゃん」

「は、はあ……」

会話の流れをぶった切って真面目な表情で問いかけてきたイリヤ。続けて漸くジュデイスの存在に気づいたのか、更には彼女の態度に困惑している生真面目な少女に、レオンは可笑しそうに笑みを零す。なんだかそのきょとんとした仕種が、彼には可愛らしくて仕方が無かった。

どうやらイリヤにはひとつの事に熱中すると周りが見えなくなる所があるようだった。

教会で一人物思いに耽っていた彼女に声をかけて首を飛ばされそうになった時の記憶を思い返し、彼は一人で納得する。

「そうだなあ……。ユクトの森までは大体十日掛からないぐらい。

あと、森での調査に長くて一週間ぐらい。森を抜けて最寄の町で定期馬車に乗るから、そこまでの食料が大体四日ぐらいだろう。だいたい三週間分ぐらい用意すればいいんじゃないかな？」

「なるほど、わかりました」

「ああ、それと」

「まだ何か？」

レオンは目の前の食料店に入っ^ていこうとしたイリヤを呼び止め、言葉を続ける。

「新しい剣も新調しとくといい」

「剣ですか？ それならば、あなたがあの時貸してくれた剣があるのでは？」

「あー、あれもう使えないんだよ」

「どうい^うことですか？」

怪訝に眉を顰^{ひそ}めるイリヤを見て、レオンは懐を探^つて何かを取り出した。

それはカードだった。

勿論、ただのカードではない。

イリヤにも見覚えのある、サラザールの屋敷で様々な奇跡を見せた魔法のカードだ。

「それは確かあの時の……」

「『ショートカット・アルカナム 神秘の欠片』。それがこのカードの名前だ。まあ、長いから単

にカードで十分だけど」

「良いのですか、それで……」

「良いんだよ、それで」

少し呆れたような表情を見せるイリヤを無視して、エクレールは言葉を続ける。

「このカードはキーワードを口にする、もしくはカード自体を破壊する事で即座に術式を発動させる事が出来るんだ。強力な術でもねけど、一度に二十二枚、そして異なるカードしか持ち歩けない。それ以上は保管場所から取り出す事が出来ない」

「つまり、あの時の剣を呼び出したカードは今は無いと？」

「そうゆうことだ」

「なるほど。だからあの時、便利なばかりではないと言っていたのですね」

イリヤは屋敷での記憶を振り返る。

あの時、エクレールは切り札と言っていた。

なるほど、それは真理であろう、と彼女は思う。

二十二回の奇跡。

多くも感じられるが、連戦や大規模戦闘ならば心許ない数字である。思えば、あの時彼がカードを初めて切ったのはトロールという難敵相手のみだった。

後は殴り倒したり、魔法薬を組み合わせで爆発を巻き起こしたり。他に聞いた話では隠し持っていた短剣を投げつけたりしたらしい。

あの時の彼の動きは確かに手馴れていた。

だが、その技の一つ一つは決して無茶苦茶なものではない。

唯ひとつ例外的に、あのカードを除けば……。

その事実に行き着いてイリヤはふと思った。

「今気づいたのですが……。もしかしてエクレール、あなたはとってもない無茶をしていたのでは？」

イリヤの問いかけに、エクレールは唇を結んで小さく笑う。

「そうだね、確かに俺は非力だ。トロール相手に互角に渡り合えるだけの身体能力や、高名な魔術師のように奇跡の無駄遣いなんて真似はできないよ。正直、君がいなければ、あの時屋敷の衛兵たち相手に戦いを挑んだりはしなかった。こんな俺じゃあ、守れるものなんて高が知れてるんだ……」

語りかけるその瞳は優しくかった。

だが、何処か悲しげな色を湛えている事にイリヤは気付く。

「エクレール？」

「けど俺は非力ではあるけど無力じゃない。だから、出来ることがあるならやっておきたかった。俺は自分の無力を理由に大切なものを諦められるほど器用な人間じゃないんだ。君だってそうだろう？」

「それは確かに……。ですが……」

イリヤはエクレールの身をただ純粹に案じた。

それは独白のようなものだった。

だが男の見せる物憂げな表情は、この数日行動を共にしたイリヤが初めて目にするもので、彼女は掛けるべき言葉を見失ってしまう。

殊ここに來て彼女は思う。

目の前の男性は、自分が思っている以上に弱く脆い存在なのではないか、と。

告げるべき二の句を見つけれず、場になんとも言えない空気が漂い始め、

「まあ、実際こうも厄介ごとに首を突っ込まれると、こっちとしてはハラハラドキドキだけだね。そこは私が守ってあげるから問題無しってことで！」

突如横合いから入った弾むような声音が、場の空気を払拭する。

「ああ、頼りにしてるよ」

「あいよ、任せといて！ あはは！」

気づけば、レオンの顔にはいつもの穏やかな表情が戻っていた。その隣ではからからと笑うジュデイスの陽気な笑顔。

沈鬱な雰囲気は最早無い。

その光景を見て、イリヤは気づかない内にポツリと漏らしていた。

「二人は互いに信頼しているんですね……」

ほのかに羨望を感じられるような声音でイリヤは呟く。

しかし、それは二人の耳には届かない。

「何か言った？」

「い、いえ。何も……」

レオンの言葉にイリヤは慌てて首を横に振る。

頭の上に疑問符を浮かべながら不思議そうな表情のレオンだったが、次の瞬間には、常と変わらぬ笑顔を湛えていた。

イリヤ自身思う。

これは幼稚な嫉妬である、と。

目の前の男と共闘したあの僅かな時間。

トロール相手に散々な目に遭わされた。

だが彼女の十七年というそれなりに長い人生において、あの時ほど安心して戦えた時など無かった。

彼女にとって初めて、誰かを頼れたと思えた戦いだっただ。

だがその相手には――、

「なあ、イリヤ」

「……っ!？」

不意に掛けられた声にイリヤはハッと面を上げる。
気づけば、イリヤの目の前にはレオンの顔があった。

そして彼は、彼女にだけ聞こえるように耳元で囁いた。

「まあ、ジュデイスも頼りにしてるけど、今はイリヤの事も頼りにしてるんだ」

「……え？」

「信頼つてのは一方通行じゃ生まれないんだ。だから、イリヤも困った事があつたら遠慮なく俺を頼ってくれよ？」

「な、え、聞こえて――」

「ああ、ところで話は変わるんだけど。ジュデイスにお礼を言っ
てなかったね。ありがとう」

「へ？ 突然どうしたのさ？」

声のトーンを囁きから普段のものへと戻し、レオンはジュデイスの方へと振り返る。

後ろで顔を真っ赤にするやら慌てふためくやらしている騎士の少女の姿に『ああ、また何か言いやがったな』ぐらいの呆れた表情を浮かべていたジュデイスだったが、突然振られた心当たりの無いお礼の言葉にきょとんとしたものへと変えていた。

「いや、サラザールの屋敷の一件だよ。ギルド側の人間を屋敷へ派遣してくれたのって、ジュデイスだろ？」

「あー、あれ？ それが……私じゃないんだよね、それ」

「そうなの？ てつきり俺の動向を聞いて要請を出してくれたものだ」と

レオンの言葉に、ジュデイスは気まずそうに頭を掻く。

それからポツリポツリと経緯を説明し始めていた。

「確かにフィオーレのギルド支部に要請は出したけど、それよりも先に動いてたらしいんだ。メアリーの話だと、なんでも匿名のタレコミがあつたんだとさ」

「タレコミですか？」

ジュデイスの言葉に、イリヤも気づけば正気に立ち返っていた。真剣な表情で耳を傾ける彼女に、ジュデイスは肩を竦めて見せる。

「そ。けど、匿名だから何処の誰かはさっぱり判らないんだけどね」
「悪事を暴き多くの人を救う切欠となつたのですから、堂々と出てくればいいものを……」

「いろいろあるんでしょ。その情報提供者にもさ」

物事は単純ではない。

悪事に加担していた者が悪事を白日の下に晒す。
だが、それは自らの過ちをも晒す事になる。

故に、名乗り出ない。

名乗り出れない。

だが、それでもレオンは思う。

「誰にせよ。どんな理由にせよ。その人が見せた最後の勇気が多く
の人を救ったんだ。それで十分だよ」

「あ、それより。ねえ、レオン。この先に評判の串焼き屋があるん
だけど今から行ってみない？」

「あれ？ 結構いい感じに締めたつもりなのに流すの？」

「あの…… 私たちは旅の道具を買いに来たのですが……。まだ何も

」

「いいじゃん、別に。硬いこと言いっこなし。荷物は邪魔になっち
やうし、後に回しましょうよ。私が奢るし、イリヤちゃんもどう？」

「え？ 私もですか？」

「うん。たっぷりの肉汁に濃厚なタレが絡んで絶妙らしいよ」

「たっぷりの肉汁に濃厚なタレ……」

「イリヤ、涎れてるよ」

「え、ええッ！？」

「ははっ、冗談だよ。大丈夫、涎なんか垂らしてないから。くすく
す……！」

「え、エクレール！」

ちよっと賑やかに、そして楽しげに、三人は花咲く街の中を歩い
てゆく。

噛み付いてくる少女の姿に笑い声を上げながらレオンは思う。

まあ、こちらのほうが自分らしいかなと。

第三節

「いやー、ごめんごめん。待った？」

「なあ、それなんだ？」

「ちよつとレオ、じゃなかった……。エクレールってば、そこは『いや、今来たところだから』でしょうに」

ユクトの森へと旅立つ当日の事。

町の入り口にて待ち合わせていたレオン達の前に現れたジュデイスはいつも通りだった。

相変わらずの冗談めいた態度で、しかもさらつとレオンの本名を口走りそうになっていたが、とりあえずレオンは合切無視することにした。

今重要なのはそこではない。

今一番重要なことは、何故ジュデイスが馬を引き連れているかという事だ。

いずれも毛並みの良い、しなやかな肉体を持つ名馬だろう。それを三頭もつれてきた理由が知りたかった。

いや、レオンには理由など聞かずとも判る。

だが、それでもやはり言わざるを得なかったのだ。

「なあ、それなんだ？」

「何って……馬だよ？」

「見れば判る。俺が聞いているのはなんで馬を連れてきてるのかって事だよ」

「徒歩より楽だよ？」

「だったらそれを前もって伝えておいてくれ……。どうするんだよ、この大量に余る食料」

げんなりしたように三週間分の食料の山を指差してレオンは言う。

当初の予定では、徒歩で移動する予定だった。

当然、買い込んだ必需品も徒歩の期間分だ。

馬を持ってきたくれた事自体ありがたい。

だがせめて、旅の準備をしている時に言っただけ欲しかったというのは我がままなのだろうか。

おかげさまで、余計な出費が嵩^{かさ}む事となった。

しかし、ジュデイスはからからと笑い声を上げるだけ。

馬具の準備を進めながら、彼女は言う。

「まあまあ。別に良いじゃん。イリヤちゃんがいるんだし、食べ物
が余る事はないわよ」

「ちよつと待つてください。なんで私が食いしん坊みたいな話にな
っているのですか！」

今まで事の顛末をイリヤは静観していた。

先日の買出しの際にさんざっぱら振り回されたお陰で、ジュデイス
の人柄については慣れたと自負していた。

だが、それでも勝手に食いしん坊キャラにされるのだけは看過でき
ない。

「えー、だってイリヤちゃんって昨日は串焼き一人で三本も食べ
てたじゃない」

「貴方達だつて二本食べていたのですからそれ程大差なんてないではありませんか！」

「でもイリヤちゃんって、涎たらしてたよね？」

「垂らしてません！！」

ぎゃあぎゃあと言い合う二人。

しかし、やはりというかイリヤは気づいていないのだろう。

別にジュデイスは本気でイリヤが食いしん坊だと思っっているわけではない、と言う事に。

むしろ噛み付いてきたイリヤをからかって、ジュデイスが楽しんでいる、と言う事に。

必死の形相のイリヤと満面の笑みというジュデイスの二人を目の端で眺めつつ、レオンは無視して旅の準備を進める事にした。馬具の調整を行い、旅に必要な荷物を馬に載せていく。

忘れ物は無い。

腰には今回のためにとイリヤと同じく新調した剣も携えていた。カードの枚数や魔法薬の残量はやや心許ないが、それでどうにかなるだろう。

準備を終えて、ふと横を見る。

まだ続けていた二人にレオンは声を掛けた。

「そろそろ出発しよう。早くしないと二人とも置いてくぞ」

「はいよー」

「あ、こらジュデイス！ 話はまだ――」

こんな感じで始まった三人の旅路は、道中終始賑やかだった。

人里を離れ、景色が移り変わる。

荒涼たる荒野、風吹き抜ける草原の漣。さざなみ

それらを眺めつつ、旅は特にトラブルらしいトラブルにも見回れず、当初の予定よりも早く無事に目的地へと到着していた。

ユクトの森。

そこは、異様な場所だった。

森の入り口に佇んで、一同は馬から下りて見上げていた。

遠くから見たとき、イリヤはそれが山か何かだと思っていた。

三十メートル級の、そこらの木々がミニチュアに見えそうな木々が生い茂っている。

更には鬱蒼と生い茂った樹木により日があまり差し込まず、薄暗く、そして時折聞こえてくる獣の声により一層不気味な雰囲気を実感させていた。

オルティシアとセルシウスを跨いで位置するこの森は、オルティシアでは『帰らずの森』などと呼ばれているような場所だ。

此処へと足を踏み入れると言う事は、相応の覚悟が必要だろう。

だが。

「なんだか薄気味悪い森だ……」

「大丈夫です。何かあれば私の剣で斬り伏せるのみです」

「あ、おいイリヤ!」

レオンの呟きにも、イリヤは気にせず奥へと歩みを進め始めていた。

一人で先行する彼女の後を、レオンとジュデイスも慌てて追っていた。

イリヤはずかずかと、傍から見ると無警戒とも思えるほど悠然と原生林の中を進んでいく。

獣道ではあったがその歩みはとても自然で、彼女がこういった場面に慣れていることを窺わせた。

そのことにジュデイスは少し意外そうな顔を見せる。

「へえ、ただの貴族のお嬢様じゃないって事か」

その言葉に、イリヤの足が初めて止まった。

「気づいていたのですか？」

「これでも大陸の情勢には詳しいからね。アイゼンバーグなんて聞いて、ピンと来ない方がどうかしてるわよ。というか、ようやく止まってくれたわね」

「……え？」

「レオンが付いて来るのに大変してるわよ？」

「あ……」

レオンは二人から少し離れた位置で獣道を歩いていた。

その足取りは十二分に早いものだったが、イリヤやジュデイスには流石に及ばない。

彼一人を取り残している事に、今更ながらイリヤは気づくのだった。

「なに焦ってるのか知らないけど、いま私たちはチームなんだから。」

たまには立ち止まって周りを見てみる事も大切よ？」

「す、すみません……」

小柄な体を更に縮こまらせて、イリヤは申し訳なさそうに俯いてみせる。

そんな彼女の殊勝な態度に、ジュデイスは『本当に真面目な子だ』と苦笑いをしていた。

「ようやく追いついた……」

「おつかれー。でもエクレール、ちょっと情けないよ？」

「無茶言わないでくれ。俺は君たちと違って普通の人間なんだよ」

少し疲れたようにレオンは言う。

が、そう言いながらも全く息を切らしていない辺り、彼を普通と言った良いかは微妙なところだった。

レオンは襟元を緩めながらイリヤへと向き直る。

「まったく、イリヤ……。君は——いや、いい。それより、まずはベースキャンプを設置しよう」

「この先に一人で進んで何をするつもりだったんだ？」

拓けた場所を見つけ、キャンプの準備をしているときだった。不意にレオンから声を掛けられ、イリヤは一瞬何のことを言ってい

るのか戸惑いを見せる。

「え？ それは、ユクト・レックスの討伐……ではないのですか？」
「ジュデイス……、ユクト・レックスの情報は？」

レオンはため息をひとつ零すと、ジュデイスに尋ねる。

「えーっと、たしかユクトの森に住んでいるとされる竜種のモンスターで、恐竜種に分類されると思われる」
「思われる？」

イリヤが疑問を差し挟むと、ジュデイスは彼女にしては珍しい曖昧な笑みを浮かべる。
そして気まずそうに頬をぽりぽりと掻きながら続きを口にする。

「正直に白状すると、ユクトの森に生息すると伝承が伝えられているだけで、実在するかも謎の存在だったりする」
「ちょっと待ってください。それじゃあ、存在するかどうかも判らないものを倒してこいと言うのですか？」
「別に倒さなくてもいいのよ。だから調査も依頼内容に入ってたわけだし。依頼内容にもユクト・レックスが暴れている“らしい”って書いてあったし」

悪びれもせずジュデイスは言う。

だが、不意に表情を真面目なものにして再び話を続けた。

「けど、この森に最近聞いたことも無い獣の声が聞こえてきているのは事実らしいのよ。だから私たちのお仕事は、その原因の解明と可能ならば事態の解決をする事」
「まるで霞を食うような話だな」

レオンの呟きに、ジユデイスはなんともいえない表情で肩を竦めて見せた。

「まあ、ね。けど相手が本当に竜種なら、ちよつとそこらのギルドメンバーの手には余るのも事実。私が来てるのも、保険みたいなものだし」

「だろうなあ……。セイランへ侵攻したオルティシア国軍五万人を殲滅した白竜事件とかもあるし、竜種は油断できないからな……」

「あの、今なんと？」

さらりとエクレールが口にした言葉に、イリヤが引き攣った表情を見せた。

いま聞き間違えでなければ、とんでもない内容が彼女には聞こえていた。

「十四年前だったかな？ 大陸西方の小国セイランに、当時のオルティシア国軍が侵攻を仕掛けて返り討ちにあつたっていう奴。戦力差は五万対三千と圧倒的だったにも拘らず、戦場に乱入した一匹の白竜によりオルティシア軍は壊滅したという事件だよ」

「ま、待つてください！ 私はそんな話聞いたことも——」

「無くて当たり前だ。富国強兵軍拡路線を突き進んでいたオルティシア政府にとつて、それは隠すべき汚点だ。是が非でも漏れ出てはいけないものだからね」

「しかし……」

レオンの説明にイリヤは納得がいかないのか、なにやら思案顔をしてみせる。

そんな彼女に向けて、レオンは言う。

「ともかく、竜種つてのはそれぐらい危険な生物だ。ユクト・レックスは恐竜種って言われているから、竜種の中では比較的下位のヒエラルキーだけど、それでも油断は出来ない。頼むから、今後勝手に突っ込んでいくような真似は止めてくれ」

そう言つてレオンが見せた表情に、イリヤの脳裏にサラザールの屋敷で初めて出会つた時の記憶が甦つた。

あの時もそうだった。

相手を労わる優しさに満ちた、彼の纏う不可思議な雰囲気。

なぜ彼は自分にこうも慈愛に満ちた眼差しを向けてくるのか。

イリヤは、それが未だに疑問だった。

イリヤは暫し逡巡する。

尋ねてみようかと思った。

誤魔化されるかもしれない。

けど、

「アオオオオオオオオオオオ！」

しかしそんな彼女の思考を、
 じだ つんぎ
 耳朶を劈く獣の咆哮が邪魔をした。

森が急に喧しくなった。

今までも時折は聞こえていた獣の声。

だが、それとは明らかに異質なもの。

いくつかの足音が地鳴りのように鳴り響き、続けて聞こえてきたのは――。

「ぬおおおおおおおっ！！！？」

遠くから聞こえてきたのは、明らかに人の声だった。
それを理解した瞬間、イリヤは手にしていた機材を投げ出し、弾かれたように駆け出していた。

「あ、こらイリヤ!」

「あー、どうする? 頭痛薬取ってこようか?」

「要らん! 後を追うに決まってるだろ!」

つい今までの会話を完全に頭から抜け落ちさせた猪娘にレオンは頭痛を感じていた。

だが今は頭痛薬を探している場合ではない。
それよりも大事な事がある。

続けて後を追うレオン。

その姿を見送りながら、ジューデイスは嘔うそぶいていた。

「本当、そっくりなんだから……」

誰にも見せた事のない優しげな色を湛えたままの呟きは、誰の耳にも届かない。

そして次の瞬間には、彼女は唇をきゅつと結び、常と変わらない樂しげな笑みを浮かべていた。

第四節

木々が生い茂る、道とも呼べない道なき道。その中を、イリヤは矢の如く疾走していた。

悲鳴の位置は近かった。

違えることは無い。

ただひたすら、ただまっすぐに。

彼女は声の元へと掛けていた。

あの声が何処の誰かなど知らない。

だが、その直前に聞こえてきた獣の囁き^{ささ}りが全てを物語っていた。誰かは知らないが、いま助けを求めている人間がいる。

ならば、助けない道理などイリヤには無い。

「見つけた！」

少し開けた獣道に出た瞬間、イリヤの視界に飛び込んできたのは濛々と立ち昇る土煙だった。

それはカニス・デイルスの群れ。

一匹の一際巨軀のボスを先頭に、およそ四、五十の個体が群れを成し、一群を形成していた。

そしてその群れから逃げるように、一人の男が群れの先に行く。

声の主は彼だった。

見た目に傭兵風と判る男だったが、彼は戦う事をせずひたすら逃

げていた。

当然である。

人間一人が群れを成したカニス・デイルス相手に挑むなど、普通は自殺行為なのだから。

「――！」

瞬間、イリヤは駆け出していた。

今までよりも更に疾く、更に力強く。

その両脚に力を籠め、彼女は一速に獣道を駆け抜けた。

傭兵風の男は、そのとき風が一阵吹き抜けたのを感じた。
それと同時にだった。

「いま助けます」

その言葉を、男は確かに耳にした。

「ギャイン！？」

断末魔が一つ響く。

男に向けて今まさに飛び掛らんとしていた一匹を、イリヤは一刀の下に斬り伏せる。

そして続けざま、彼女は飛び掛ってきたもう一匹を横薙ぎに斬り飛ばした。

今度は声も何も無い。

イリヤは一拍の間、剣を構えなおすと、男とカニス・デイルスの群れの間に立ち、その行く先を阻むようにしていた。

群れは立ち止まっていた。

突如現れた乱入者に仲間を二匹も殺された事に、僅かながら動揺が広がっていた。

だが、それも束の間。

次の瞬間には、群れは勢いを成してイリヤへと飛び掛かる。その悉くを遍く斬り伏せるべく、イリヤは全身に力を籠め、

——瞬間、イリヤの眼前に一筋の流星が舞い降りていた。

「——ッ！」

突然の事態に、イリヤは驚き目を細める。

轟音が響き、飛び掛ってきた一匹を“それ”は直撃した。

音に見合った衝撃波を巻き起こし、その余波で他の飛び込んできたカニス・デイルス達も吹き飛ばされ、木々へと強かに叩きつけられていた。

この惨状の元凶であるそれは言う。

「ジュデイスちゃん華麗に参上！」

落下点に出来た小さなクレーター。

その中心地で物凄いどや顔を決めつつ現れたのは、イリヤも良く知る人物だった。

その予想外の登場にイリヤが戸惑っていると、ジューデイスは高く跳び上がりイリヤの横に降り立つ。

「ま、カニス・デイルスぐらいなら余計なお世話だとは思うけど、お手伝いに来たよ」

そう言いながら、ジューデイスはイリヤに背を預けるようにしていた。

衝撃波で吹き飛ばされたカニス・デイルス達も、体勢を立て直しつつあった。

「……いえ、とても心強いです！」

その一言共に、二人は互いに二方へと駆け出した。

戦場を蹂躪する圧倒的な二つの力。

その光景を目の当たりにして、男は呟いていた。

「やっぱり凄え……」

男が立っていたのは、二人が戦っている所から少し離れたところに立っていた。

今まで逃げ続けていた彼だったが、ことのほか冷静に事態を把握していた。

突然助けに入った二人の女性。
その戦いぶりは将に圧巻だった。

「本当、凄いよね……。というか、これ俺は必要なかったっぽいなあ……」
「のわあ!？」

素直に驚いていた傭兵風の男だったが、突如横合いから掛けられた声に更に驚き跳ね上がっていた。

隣に立っていたのは黒衣の男。

全身黒尽くめなのに首にだけ純白のマフラーを巻いた眼鏡の男は、木の幹に凭れ掛かりながら肩で息をしていた。

彼を見た瞬間、傭兵風の男は更に驚いたように言う。

「あ、アンタあの時の!」

「や、やあ、サラザールの屋敷で会って以来だね……」
「ごほっ」

「だ、大丈夫か？」

「ごめん、流石に獣道を全力疾走は少ししんどくて……」

傭兵風の男は、レオンの背中を摩りながら気遣うように言う。

レオンとしても、自分より年下の女性が絶賛活躍中の最中、一人体力切れで男に慰められている現状に不覚にも涙が零れそうになっていたが、とりあえず考えないようにする事にした。

文字通り弾丸のような速度で走り抜けたり、木々から木々へと猫のように飛び移っていたあの二人を、見た目どおりの見目麗しい女性などと思わないほうがいいのだ。

と、レオンが現実から目をそらしていると、一際高い獣の咆哮が

響く。

それを耳にしたレオンは、イリヤたちに向けて言う。

「もう大丈夫だ、それ以上はいい！」

その言葉にイリヤが訝しむと同時に、カニス・デイルス達はいっせいに身を翻すと、森の奥へと消えていった。

その退却劇は驚くほど迅速で、イリヤは獣相手ではあったが感嘆の声を漏らさずにはいらなかった。

「力の差を実感して、被害がこれ以上大きくないうちに撤退……。見事なものです」

「ギルド側としてはああいう手合いは殲滅しづらいからご勘弁だけどね」

カニス・デイルスで作り上げられた死屍累々の光景の中、二人は大して疲労した様子も無く、これといった怪我も無く談笑していた。

戻ってきた二人に、お疲れ、とレオンは声を掛ける。
少し照れくさそうな、それでいて誇らしげな二人の表情が印象的だった。

それからレオンは、傭兵風の男へと振り返っていた。

「こうしてまた会えたのも何かの縁だ。良ければ、少し話を聞かせてもらっても良いかな？」

「あ、あははは……」

此処で駄目と言う選択肢など、男には無かった。

目の前の黒尽くめの男と金髪の女騎士の実力など疾うに理解していたし、なんかよく判らないがもう一人化け物みたいな女まで増える現状で、男が言える言葉などただ一言だった。

「喜んで……」

第五節

アベル・フェベルという男がいた。

彼はオルティシアの帝都で、いわゆる貧民街と呼ばれる場所で生活していた。

母は幼い頃に他界。

父親に至っては顔すら知らない有様だった。

物乞いをした日も有れば、飢えを凌ぐ為に何なのか良く判らないような肉も食べた事がある。

そんな生活を送っていたアベルだったが、十五になる頃、彼は騎士団に入隊した。

別にお国の為に尽くすという柄ではなかった。

騎士団に所属したのも、単に給金良かったからという理由だ。

けれど、彼は後に自分の浅慮を呪った。

道を誤った、と。

彼が所属した頃の騎士団は、ちょうど先帝時代。

日々日々、戦争に明け暮れていた。

いくつの死線を超えたか、もはや覚えていない。

同期だったものの中で生き残った人間は、誰一人としていなかった。

それでも最後まで生き残れた辺り、自分は幸運な人間だったのだろつ。

彼はそう思った。

結局、地獄の先にあるのはまた別の地獄だった。

そして季節が一巡りした頃。

『皇帝、崩御……？』

呆然とそう呟いた事を、アベルは未だに覚えていた。

その一報と共に、長かった戦争は終わった。

戦場で聞いた時、信じられなかった。

それぐらい、あつけない幕切れだった。

そして再び季節が一巡りした頃。

男が立っていたのは、ギルドの受付ロビーだった。

もう、騎士団にはいらなかった。

彼を知る者は、もはや誰もいない。

笑い合える仲間たちはみな死んでいった。

どうしてもっと早く戦争が終わらなかったのだろうかと思う。

「アベル・フェベル様ですね。ただいまギルド『ゴールドバーク黄金の園』への登録が完了いたしました。こちらがギルドメンバーの証明となりますので――」

人との殺し合いが嫌で、ただただ戦争が嫌いで。
それでも戦いしか生きる道が無かった男の、それは必然の選択だった。

た。

腕にはそれなりに覚えがある。

そしてそれ以上に、今まで生き残ってきた経験があった。

自分より強い相手とは戦わない。

強い奴がいるなら五、六人で袋叩きにする。

引き際を見極めて、やばくなったら即行でずらかる。

騎士団の貴族出身連中なら『卑怯者』と罵るであろうそれを、彼は善しとしてきた。

故に、アベルは今までを生きてこれた。

だが……いや、そんな彼だからこそ、思う。

今のこの状況から生きて帰るのは無理かもしれない、と。

「あのお……」

「なんですか？」

アベルが恐る恐る声を上げると、間髪入れずに朴訥ぼくとつとした声が返ってきた。

傭兵風の男改めアベル・フェベルは今、三人の男女に三方を囲まれながら絶賛正座中だった。

別にやれと言われたわけではないが、何故か自然とその姿勢だった。

「いえ、なんでもないです。ごめんなさい……」

「何故謝るのですか？ ……まさか、また何か悪事を！」

「違いますですよ！？ ただこれはなんとなく謝らざるを得ない雰

困気だっただけであって、このアベル・フェベル誓って悪い事は何もしておりませんのことよ!？」

「なにその言葉遣い……」

ジュデイスは一言呆れたように呟くと、隣にいるレオンへと向き直る。

「で？ この男と知り合いっばいんだけど、いったいどういう関係なの？」

「サラザールの屋敷で雇われていた傭兵と、屋敷に囚われていた奴隷たちを開放しに来たヒーローって関係」

「よし、敵か」

「ちょ、お願いします！ 本気で洒落にならないんで勘弁してください！」

爽やかな笑顔で指の骨をボキボキと鳴らし始めたジュデイスを見て、アベルは即座に土下座の体勢に入っていた。

その間僅か一秒未満。

無駄に神速である。

「まあ、ジュデイスもからかうのはそこら辺にしておいてあげなよ。

……というか君、屋敷であつた時は『いつでも死ぬ覚悟は出来てる』みたいなこと言ってなかったっけ？」

「いや、ちよつとあの時は色々と考え事とかしてて……なんつうか、ちよつと自棄になってたつていうか……」

バツが悪そうに頭を掻く男。

対するレオンは、以前屋敷で話したときの余りのギャップに全身の力が抜け落ちていくような気がしていた。

が、やおらアベルは表情を改める。

それにレオンが気づくと、アベルは一言訊ねた。

「その……サラザールの一件、どうなったかな？　ほら、奴隷の人たちとか……」

「サラザール？　どうしてそんな事を気にするんだ？」

「あー、その……なんとなく？」

今までとは毛色の違う不安の色を湛えた瞳で、彼は問う。

それは怯えから来る不安ではなく、心配している——誰かを案じた不安の色。

その事実に行き着いて、レオンは一つの可能性を考えていた。

レオンは言う。

「……サラザールはギルドで身柄を確保されて、然るべき罰を受ける事になった。奴隷として囚われていた人達に関しては、故郷に帰ることになったよ。希望している人はギルド側で生活の面倒を見ている。——君がギルド側へ情報を提供してくれたお陰だよ」

瞬間、男の瞳がハツと見開かれる。

「な、なんで知ってるんだよ！？」

「……まさかこんな簡単な鎌かけに引っかかるなんて。はは、素直で宜しい」

レオンの言葉にアベルは、しまった、と苦い顔をする。

だが、一度口にした言葉を引っ込めることなど出来はしない。

どうしたものとアベルが考えあぐねていると、

「何故、名乗り出なかったのですか？ あの時あなたは正しい選択をしたはずです。結果として、多くの人々を救う切欠の一つとなっただけです。なのに、何故……」

複雑そうな表情のイリヤに、アベルは自嘲するかのようないしを零す。

そしてため息を一つ吐くと、まるで独白のように言葉を発した。

「何か違うんだよね……。結局自分の力で何かを変えようとした訳でもない奴が、胸張って威張るとか可笑しい気がすんだよ。知らなかったとはいえ、悪事に加担してたくせにさ」

「けれど、君は自分の出来る範囲で最善を尽くしたはずだ。紛れもない自分の意思で、自分が歩むべき道を選んだ。無力は恥じゃない。真に恥ずべきは無力を盾に戦う事を放棄する事だよ」

「は……。そう言ってもらえると少しは救われる、かな？」

ほんのすこし。

ほんのすこし、男の表情から影が消えていた。

「ところで……」

と、それまで黙っていた静観していたジュデイスが口を開く。

「結局、あなたなんでこんな所にいのよ？ ギルド側から追跡があると思って逃げてたとか？」

「あ？ いや、そんなじゃないよ。此処に来たのはギルドの依頼でカニス・デイルスの討伐に来たんだよ。本当は他にチームを組ん

だ奴らも居たんだけど、あいつらいざとなったら我先にと逃げ出して本当に使えねえの何の……。つか、無名の雇われ一傭兵に追っ手を放つほどギルドも暇じゃないだろうしさ。俺そこまでアホじゃないぞ?」

心外だとも言いたげな視線をジュデイスへと向け、アベルは事の顛末を告白する。

要約すると討伐に来て文字通り返り討ちに遭った、と言う事だった。

十分マヌケだとレオンは思ったが、拗れそうなので口を噤んでおくことにした。

すると、ジュデイスは眉を顰めて、

「それ本当? 危険度Sの依頼が発生している地域で他の依頼が振られるなんてあるはずないんだけど……」

「そうなのですか?」

「は? ちよつと待て! え? なに、もしかして此処って今S指定地域なのか!?」

アベルの表情が驚きに染まる。

レオンには、その表情に嘘はないように思えた。

「まさか……」

「ん? 何、エクレうわ!?」

「ちよつと来て、ジュデイス」

もしかやと思い、彼は隣にいるジュデイスの腕を引っ張ってイリヤたちから少し離れる。

突然の事にジュデイスは少し驚いた表情を見せていたが、レオンは構わずに耳打ちをする。

「確か、この依頼ってセルシウス支部が管轄してるんだよね？ 彼が依頼を受けたのは恐らくオルティシアの支部だろうけど、オルティシア支部にちゃんと連絡した？」

「……………あ、やば」

「おい、今なんて———こら、目を逸らすな」

「いや、嘘だつて。冗談だよ。たぶん入れ違いになっちゃっただけだよ……………」

「……………本当だろうね？」

「うわ酷い！ 信じてくれないの!？」

「これに関してはイマイチ信用できない……………」

ころころと百面相をしてみせるジュデイスに対して、レオンは半信半疑の疑いの眼差しを向ける。

ジュデイスは信頼に足る人物だが、こういった細かい作業に関しては大雑把な嫌いがあったのだった。

長い付き合いでジュデイスをよく知るが故の、致し方ない反応と言えた。

「なに話してんだ、あの二人」

「さあ、私には……………」

ぼそぼそとした二人の会話に、内容の把握が出来てないイリヤとアベルは頭上に疑問符を浮かべて屹立^{きりつ}していた。

が、不意にアベルは大きな溜息を吐くと、

「だあ、もう最悪だ。どうせギルドのお偉方の連絡ミスとかだろうけどさ。どんな杜撰な管理だっつつ話だろ」

「それは、まあ……」

「お偉方は嫌いなんだよなあ。昔所属してた騎士団の部隊長達も碌な居なかつたし……。命令ばっかで自分で動かないから騎士の癖に完壁肉だるまだったんだよ。きっと、このギルドの依頼しくじった奴もそんな感じなんだぜ？」

「あ、あの、アベル……。そこら辺にしておいた方が……」

一瞬、場の空気が変わったのをイリヤは肌で感じていた。

やや蒼褪めた顔色でイリヤはアベルを止めようとしたが、肝心の彼はそれに気付かなかった。

「なんでよ。良いって、別に相手がここにいる訳でもないんだし。

寧ろ居ないから言える事もあるわけだし？ ははっ、たぶんアレだぜ？ 脂ぎってて歳は四十ぐらいで息も足も臭くて全然モテないからお金払って女侍らせてるような典型的な——」

語りだした彼は止まらない。

どうやら過去の嫌な上司への鬱憤込みでぶちまけている様だが、イリヤは気が気ではなかった。

助けを求めるようにイリヤはレオンへと視線を向ける。

するとレオンは、胸の前で十字を切ると両手を合わせて神へと冥福を祈っていた。

仮にも魔王の国に住んでいる人間が神に祈るのはどうなんだろうと思わなくも無いが。

ともあれ、レオンは頼りにならないと判断したイリヤは、どうに

かアベルを黙らせようと思案して。

アベルの目の前に、とても恐ろしい満面の笑顔を浮かべたジュデイスが立っていた。

「ん？　どうかした？」

「いやあ、そーいやまだ自己紹介がまだだったと思ってさ。あそこ
の黒いのがエクレール。で、こっちの金髪がイリヤ・シュヴァルツ・
アイゼンバーグ。で、私がジュデイス・G・バードッグ。よろしく
ね、アベル」

そう言っ、ジュデイスは右手を差し出していた。
その手を、アベルは躊躇^{ためら}わずに握り返す。

「おう、よろしく。……あれ？　アイゼンバーグ？」

「で、ね」

「ん？」

ふと、ジュデイスの声音が変わる。

何処か歪な金属音のような声音に、この時になってアベルも漸く何
かが可笑しい事に気付いていた。

ジュデイスは言っ。

「私、セルシウス支部の大支部長をやってるんだ」

瞬間、アベルの中で時という概念が凍りついた。
ぶわっと全身の毛穴から嫌な汗が噴出し、さあっと血の気が引いて
いく。

めくるめく走馬灯の中、彼は思う。

そう言えば、セルシウスの大支部長がそんな名前だったなあ、と。

だがそんな彼の事などお構いなしに、間髪入れずにジユデイスは言う。

「ジユデイス・G・バードッグ。セルシウス支部大支部長で年齢は十七歳。好きな人はエクレールで、好きな食べ物は串焼きで――

――」

「え？ 年齢サバ読みすぎ……」

「趣味はワンハンドシェイクデスマッチを少々……」

「ちょ、すみませんごめんなさい調子乗りました――」

「……なんてね。くすくす！」

「はい？」

ぎゅつと握り締められた拳が音速で飛んでくると覚悟していたアベルは、ジユデイスが突如破顔したことに驚く。

「あのお……？」

「いやあ、まあこっちこそ不手際の所為で危ない目に遭わせて、それは本当にごめん。でも、ちょっと言い過ぎじゃない？ 乙女をおっさん呼ばわりは傷つくわ」

「あ、すみま……」

「だから、まあ差し引きデコピン一発で済ませてあげる」

「え――あべは！？」

刹那、ピン！ という何かが弾けるような音が響き、アベルは重力に対して勢い良く垂直に吹っ飛んでいった。

ノーバウンドで茂みに突っ込んだ男を無視して、ジユデイスはイ

リヤに声を掛ける。

「イリヤちゃん。ちょっとそこら辺の探索をしてきましょうよ。あ、レオンはベース設営の続きをお願いね」

「あ、ああ……」

「ほら、行くわよイリヤちゃん」

「え？ あ、あのちよつと、引つ張らないでください！」

ずるずると手を引きづられて、イリヤはジュデイスと共に茂みの向こうへと消えていった。

二人が居なくなり、再び静けさが支配した森の中で、レオンは問いかける。

「……大丈夫かい？」

「アンマリ……ダイジョバナイ……」

とりあえず、生きてはいるようだっただ。

それを確認したレオンは、ひとまず茂みの中から突き出した男の下半身を引き抜く作業から始めることにした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5321v/>

ほのぼの魔王ときまじめ勇者

2011年11月28日02時42分発行